

のピリ加減におどろき、一莖草丈六身を現ずといふ禪家の語も思ひ出される。

彼の特色は、其の唐辛の辛味と、砂糖の甘味とを調和し、而も比類稀なる健脚にあり彼の一枚看板「公僕」の特色も、此の二つの武器に依つて、十年一日の如く保たれて来たと断定しても、勿論不服はあるまい。

市會議員としては市の「公僕」道會議員としては道民の「忠僕」を以て任ずる處に、彼の眞骨頂を觀る、其の公僕と謂ひ、忠僕と稱する、決して掛値なき彼の心情である、世或は彼自身の勢圏擴張、他日の雄飛に備へんための方便に過ぎないと邪推するが、其れは自分勝手の臆測に過ぎない、人各々見る處あり、考ふる處あり、邪推する者は、勝手に邪推すべく、臆測すべし、未だ會つて人の爲に計つて、代價を要求するを聞かず、一事一物、代價が伴ふと見るは、己れの醜を推して、人の美を傷けんとするの妄想謬見だ、彼は徹頭徹尾、天真爛漫的の公僕であり、忠僕であるのだ。

人或は言ふ、彼は八方美人主義なりと、是れ實に適評である、恐らく彼は無上の光榮に感ずるであらう、八方美人とは一切平等と解すべし、圓滿無碍の心情を有するにあ

らずんば、八方美人主義は出現し得ざるなり、更に之を解剖すると、調和主義とも言ひ得る、調和は公平無私にして、始めて得られる、世に所謂八方有毒主義、喧嘩口論主義者の眼より觀れば、阿由葉君は煮へさらざるものと解せられるかも知れん、要するに八方美人主義を呪ふものは、則ち調和を呪ふ譯になる、既に調和なし、世は殺風景に終はらざるを得ない、阿由葉君は社會の百面相より觀て、調和劑たるを失はない此處が彼が傑出の處であらう。

聞達を望むは、人の情である、相當の位地を占め、相當の名を弘め、相當の財を蓄ふところを希望しないものは、天下廣しと雖も、恐らく一人も之あるまい、是千万人共通の冀望であり、宿願である、或は不相當の位地も、功名も、財産も欲しがる慾張屋に乏しくない、之を稱して大望を抱くと謂ふ、人間意の如くならざるもの十に八九だ十を望んで漸やく二三を得られざる不自由の世だ、志は成るべく大なるを要する、併し達すると達せざるとは一に天の配采に據ること、是に於て遇不遇があり、運不運がある、阿由葉君は幸運の人であるか、薄運の人であるかは、前途ある彼れに向つて、

是非の斷案を下すは早計である。

現金主義の世に在りて己を空ふして、他の世話を焼きて倦まず、阿由葉君の如きは、蓋し稀れである、世には随分恩の押賣を試むるものあり、他の世話を焼く半面には、報酬が伴ふ、假し即座でなくも、將來に於て世話焼賃を望むのだ、此等を恩の押賣と稱する、阿由葉君の世話焼は、同情心から發露して居る、己を推して人に及ぼすのである、即ち人間自然の世話焼で、報酬を需むる偽善的行爲であるまい、例せば夫婦喧嘩の仲裁から、嫁取り婿取りの肝煎葬儀の世話、火防衛生の世話に至るまで、公私共に多くは彼を煩はさざるはなし、斯の如きは無報酬の勤勞を、自家の天職と信ずる人にあらずんば能はず。

恬淡無慾にして、功名の念至つて薄く、富貴榮達、視て浮雲の如し、得て喜ばず、失ふて悲まず、其の能く然る所以のものは何ぞ、禪家の所謂大死底の眞意義を諒解するからである、悉く境遇に甘じて、境遇の變化を残念とも口惜とも思はぬ、昔、秦の宰相東陽侯平は、秦の滅亡後、百姓と爲つて、瓜作りとなつた、一國の總理大臣より

士百姓、實に九天直下の激變、而して彼は安心立命の地を此處に求めて平然たり、想ふに吾が阿由葉君亦郡牛と心事を同ふする者ではあるまいか。

阿由葉君は敬神家である、忠誠なる敬神家である、身命を八百萬神に捧げて惜まぬ、彼の行爲は、一に神慮の儘である、彼の信念は神に基き、彼の博愛慈善調和の精神は亦神より流れると觀るべし、明治十五年、札幌神社主典となり、次で禰宜に進み、更に宮司に昇り、二十三年に至る、爾來神に仕ふる心を移して、公共に盡すに至つた、其の公僕たり、忠僕たる觀念は、九年間神官生活に依りて固められたのであらう。

彼の常識は、年と共に發達し、知見亦年と共に拓く、彼は天稟の智識と、調和の才を社會的政治的に揮ふの義務を悟り茲に境遇の激變を餘儀なくしたり或は新聞記者となり、或は札幌區會議員となり、或は道會議員となり、或は代議士の候補者となり、或は實業家となり、學務委員となり、火災豫防組合長となり、政黨屋となり、今は籍を政友會に置けり、彼が政治上に有する趣味の幾何なるやを知らず、又政治的抱負を興かり聞くを得ずと雖も、彼が政客として、恐るべき潜勢力を有するを否む能はぬ、普

選實施の曉に有力な競争者として代議士候補の名簿に登録せらるべきは、必然の事と想はる、彼の前途多幸なりと謂つふべし。

### 札幌酒造會社長 山田利吉

人各々能あり、不能あり、賢あり、愚あり、其の長を取つて、短を棄つる處に、適材適所主義が生れる、國家の政務が振はないのは、不能を薦めて能を却ぞくるからだ、國運の進展は、賢を擧げて愚を遠ざくるからだ、是こそ、千秋万古、變らざる眞理である。

人物の不經濟は、適材を適所に配せぬ處に生ずる、人各々其の長所に遵ひ、長所に働き、長所に勤みなば、失敗を招かんと欲するも能はぬ、利吉は腰辨を味ふて失敗した併し其の失敗や不成功は寧ろ當然であらねばならぬ、何となれば彼は彼の本然の性を

矯めたからである、嫌々ながら腰辨の役を勤めたからである、彼は曾つて岡次郎太郎が網走支廳長たるや、其の幕下に課長の位置を占めたと記憶する、岡は熊本縣人で豪傑肌の男であつた、豪放磊落の男であつた、小事に屑々たらざる無關心の男で、万事が遣り放しなりしは己を得ない、之が女房役たる利吉君等の課長連が、氣骨の折れたこと並大抵ならざりしと推察する。

放膽なる岡支廳長は、悉く利吉課長を信任した、而して事務の一切を切り盛さした、利吉君亦士は已れを知る者のために死する概を示した、此の時に於ては、次郎太郎と利吉君とは孰れが支廳長様なるかの判断に苦まじめた、所謂支廳施政の方針なるものは、一に利吉君の方寸から割り出された、他支廳に於て見るべからざる勸業の施設は利吉君の苦心經營に懸る處である、其の當時網走支廳の成績が、拔群の榮譽を恣にするに至りしは只管利吉君措畫の功に頼らざるを得ず。

岡氏が辭職するや、利吉君も之に殉じた、記者が利吉君を目して、官吏の失敗者と斷ずるは職務上の失敗を指すにあらずして、志を官海に伸ぶる能はず、中途にして蹉跌

したるを謂ふのだ、官吏に失敗したる彼は、實業界に於て成功した、今や彼は本郷嘉之助君の後を承けて、札幌酒造株式會社の社長たり、會社の面目は一新され、業務の發展は駭目に値す、是れ即ち適材を適所に配する結果ならざるべからず、彼は一面繁忙の時間を割き、札幌市會議員として、市の繁榮策に全力を傾倒しつゝあり、其の恭謙にして誇らず、溫良にして争はず、一面好々爺を装ふて、而も智謀湧くが如し、常に公正の見を持って偏せず、近來稀に見る公人の器である、若夫れ利吉君の細評に至つては、乞ふ之を他日に譲るとしやう。

### 財産の世襲を排する 地崎宇三郎

一代にして築き上げた財産を、一代にして使ひ果たす、即ち財産を世襲にしないと云ふことは、最も小氣味の好い行爲であるが、是れ金満家の最も苦痛とする處である、

財産を世襲にしやう、子孫をして餘慶に預からしめやうとするのが、一般人の心情である、子々孫々を幸して、家門の榮を圖るために、辛苦艱難して財産を作るのである西郷南州のやうに子孫の爲めに美田を買はざる主義は、詰り家を顧みず、又子孫を顧みない譯合で、斯様な親を持つた子孫は災難であるが、而も翻つて其の心底を叩けば言ふに謂はれぬ美味を含む。

地崎宇三郎は本道土木建築請負業界の權威と言はれる、官廳の指定請負人たる名譽を擔ふて居る、彼は世襲財産無用論者だ、自分の儲けたる財産を子孫に残さず、自分一代で公共事業や、慈善事業のために使ひ果たすと云ふ決心を極めて居る、寔に殊勝の至りであるが、彼が此の決心を固むるに至つた原因を窮むると、其處には言ふに言はれぬ苦惱がある、詮じ詰むると、彼は己を得ず世襲財産否認を發意せしめられたのである、固より一文半錢たりとも子孫に遺さぬと云ふのでない、餘分の財産を遺さぬことにあるは辨ずるまでもない、若し財産を相續すべき子孫が、不幸にして不肖の子であつたならば、産を残すは即ち罪惡を遺す所以で、此の場合に於ける親の慈悲は、

子の罪を減消する手段を講ずるにあり、小人玉を抱いて罪ありとは、千古の通り相場だ、故に財産さへ無ければ、先づ罪あつても淺いのだ、又一面から言ふと、其のため不肖の子が善人に蘇がへらぬとも限らぬ、親は何故に財産を相続させないだらうかと沈思黙考したならば、自分の不肖が判かり、改過遷善の途が開けて奮闘し、或は親に勝るの財を造らぬとも限らぬ、想ふに地崎君が世襲財産無用論者となりしは、斯の如き信念と遠慮からではあるまいか。

彼は熱心なる敬神家である、遠く建國の精神に則つて養へる思想は、敬神の觀念から流れ出てゐる、只神前に額くばかりが信心家でない、心からの信仰は身分相應に之を事實に現はすにあり、身の窮迫に陥り、進退維れ谷まる際のみ、俄かに思ひ出したやうに、神に祈願を置めても、左様に輕薄な、左様に現金な心根を、神の嘉納し給はぬは必定だ、地崎宇三郎の敬神は、輕薄から現金主義から出發したのでない、一點偽りなき真心からである、彼は曾つて札幌神社の神境を飾ざる赤銅の大鳥居を献納した、之に要する費用は、其の奉納式に知名の士を招待した経費を加へて一万七千圓、其れ

のみではない、大の如來信心家だ、西本願寺の大檀家である關係から、西別院の門内をコンクリートで固めた立派な道路を寄附した、尙更に遊園地に鎮座まします伊夜彦神社の神輿を寄進した、其の額は千數百圓である、其他祭典費の如きは、毎年一般民に卒先して多額を寄附するが例である。

彼は人一倍同情心に富んでゐる、曾つて關東地方の大震災起るや、彼は未だ一般に寄附募集の舉あらざるに先ち、早く一千圓を義指し、寄附の皮切りをやつたことで、一班を推知し得られる、同情心が愛市となつて現はれるは不思議でない、彼が札幌市を愛するの熱度は非常に高い、到底偽善的愛市者の追従し能はぬ處だ、彼は常に札幌から一文の金でも他に流出しないやうに、而して又一文でも多く札幌に吸収するやうに心掛けてゐる、彼は土木建築工事の請負人として、手廣く各地に施工してゐるが、未だ曾て只の一回も札幌では工事を請負はぬさうだ、他なし札幌市民から利益を絞らぬためである、成るべく札幌市に金を落さうくと心掛くるため、彼が各地に行ふ大工事に要する物資の供給は、特に札幌の商業家から仰いでゐる、故に工事を受取つた毎

に札幌商人の懐は肥へて行くのだ、實に奇特な心掛けである、されば彼の恩恵を蒙れる商業家は、福の神として恵比須大黒さんの次に崇めるも道理だ。

今一つは札幌の小商人を潤ふすことだ、根室線イクター驛附近に石灰山を有し、數百の人夫を役し、盛に採掘せしめてゐる、毎年一回盛大な「山祭」を舉行する、當日は無禮講の大饗筵が開かれる、下戸は下戸なり、上戸は上戸なりに、鱈腹飲んで鱈腹喰ふ酒池肉林とは此の山祭を形容したのだらう、其處で人夫等は年に一度の山祭を樂み待つこと、恰も幼兒がお正月を指折り待詫びると同様だ、山祭に用ふる酒、ビール、サイダから壽司辨當、酒の肴に至るまで、一切のお馳走は、總て札幌から仕入れるさうだ、故に其等の商人は深く彼を徳としてゐる、彼は多くの人が言て行ひ得ない、札幌の繁榮策を實行してゐる、身を殺して仁を爲す者、勇者義者俠者にあらずんば、何ぞ能く斯の如くなるを得ん、併し彼も人間だ、勿論缺點は免かれまい、新らしい疊でも叩けばゴミが出る、功過相償ひ得ばたれりとしなければならぬ、徳富蘇峰先生の人間觀に曰く、人間は全く動物でもなく、全く神物でもない、人間の半は天使に屬し、他

の半は惡魔に屬する、人間を全く理想化して天使となすは、人間を買被りたる者だ、されど全く動物化し惡魔となすは、人間を買ひ下げたる者だ、人間を只だ人間有りの儘に其の實値相當に値踏みせねばならぬと、記者も同感だ、地崎君の缺點は善行に依り帳消されねばなるまいと信する。

## 札幌電鐵營業課長 黒澤美徳

生者必滅、會者定離、是れ釋迦に依りて發見された真理でない、天地開闢の初より定まれる大法だ、人生朝露の如しとは、此の大法を現實的に説明したるに過ぎぬ。

人一たび無常の風に誘はるれば、茲に人生の總勘定が附け得られ、人事の一切が葬り去られる、實に浮世は人生の假りの宿である、生れて死す、天地の悠久より觀れば、僅かに一瞬時のみ、榮枯盛衰、何の物かは、其の悠然として生れ、悠然として死する

を得ば死固より悲むに足らず、唯悲むべきは、天命に遵はず、短かき浮世の旅行をば悠然と終はり能はぬものであらう。

札幌電鐵營業課長黒澤美德君、大正十五年五月十二日午前三時、忽然として逝く、彼は血管栓塞症に斃れたのだ、其の死や、何の苦痛もなく、何の心配もなく、悠然として安らかに永き眠に就けり、天を樂むものにあらずんば、曷ぞ能く斯の如くなるを得んや、如何に生者必滅の理を悟るものも、此の急變に對しては、實に人生の悲哀を感ぜざるを得ない、況んや日夕親しく歡談笑語を交へたる知友に於てをや、況んや最愛の妻子に於てをや、又況んや恩愛盡させぬ親兄弟に於てをや、誠や、死は人生悲哀の極致である、一朝にして幽明境を異にす、誰か萬石の哀涙を禁じ能ふぞ。

逝くは歸するの理を知る記者も、殊更に彼の死を痛惜す、如何に人生は不自然なるにせよ天の餘りに人物經濟について放漫なるに苦情を鳴らしたくなる、天下無用の人物に乏しからず、而も彼等の命數は割合に長し、國家有用の人才に至りては、割合に短かく、使命を完ふするに至らずして逝く、天若し殺すべくんば、無用の人物を殺し、活

かすべくんば、有用の偉材を活かすべしだ、天の人物經濟を無視するも亦甚だしからずや。

彼は天稟の才氣を、社會的に又國家的に揮ふに及ばなかつた、彼は宿昔青雲の志を懷いてゐた、而し其の志を遂ぐるにたる、多くの資格を具備してゐた、學殖に於て然り經驗に於て然り、材幹に於て然り、人格に於て然りしなり、彼はかつて其の好む處に従つて身を立て志を伸ばさんと欲し、財界に足を投じ、手を金融業に染めた、然も人生の行路崎嶇多し、意の如くならず、感可不遇の境に陥らんとした、彼は悠然と構へて窺かに機會の到來を待つた、偶々札幌電氣軌道株式會社の聘に應じて札幌に來り、節を屈して營業課長の椅子に甘じ座した、蓋し岳父の懇請黙止し難きに依る、固より一時的腰掛に過ぎない、之に終生を托するとは思はなかつた。

美德君は明治六年、黒澤宗明氏の次男に生る、父は舊秋田藩の碩儒で、英漢學に造詣あり、當時英學を好くするもの氏を以て嚆矢と爲す、乃父は夙に泰西の學に親み、新智識を攝取したる新人であつたのだ、美德君長じて早稻田専門學校に學び、大隈式の

洗禮を受けた、學ぶ處は財政經濟、業を卒へて日本銀行に入り、學理の實地活用を試みた、次で米國エール大學に財政經濟學を專攻し、學殖愈々豊富を致す、明治四十一年歸朝して、三菱銀行其他二三銀行の支配人となり、非凡の手腕を揮ふた、其の中央商業銀行支配人時代は、彼の最も得意の境遇にて、才華充分に煥發せしめた。

人と爲り温厚篤實、特に同化力に富んだ、而も敬して狎るべからざる威嚴を具ふ、凡てが開放主義で、努めて干涉主義を排して居たが、言はず語らずの間に、能く節制を保ち放漫に流れなかつた、人に接して城壁を築かず、頗る友情に富み、物質慾に乏しく、他人の事をば恰も吾が事のやうに肝煎、衆皆な其の徳を仰げり、其の物事に屈托せざる所から、一般人の眼には恰も「樂天家」の如く映じたであらう、然り彼は正しく樂天家に相違なかつた、而も是れ天命に安ずるを謂ふので、心腔には抑ふべからざる霸氣を包藏した、世の所謂お人好しと誤解してはならぬ、暫らく鋭鋒を收め、韜晦して機會の到來を待つのであつた、而も其の機會の遂に到來しなかつたことを残念に思ふ彼の嗜好は魚釣と鐵砲とで、釣は大公望たり、射は貫虱の技ありと謂へる、悵然として瞑目すれば、故人の温容髣髴として迫る、嗟悲ひ哉、噫痛ましい哉。

### 策の人 遞信大臣 安達謙藏

黨人として、安達謙藏は憲政會に、極めて必要の人物である、無論憲政會は多士濟々たりであるが、千羊の皮は一狐の腋に如かざるを知らば、如何に安達が人用の人物であるかが判かる、江藤哲藏の死後、機略機智に富むことに於て、政友會で安達の向ふを張り得る人物を探むれば、只一の岡崎邦輔あるのみだ。

岡崎の智慧を、陸奥宗光式と觀たならば、安達の智慧は佐々友房式である、岡崎は陸奥を師匠と仰いだ如く、安達は佐々を先生と仰いだ、三浦觀樹將軍は兩人を小才の利く男だと評するが、夫れは輪廓の大きい、三浦將軍の眼に映ずるだけで、今の政黨屋中には、小才どころか、大才の大才と珍重がつて可い、今の憲政、今の政友、能く時



務を知り能く時務に通じ、而して之を實現するの能力あるもの、彼等兩人を措て、何人がある。

空理空論に長ずるもの、兩黨其の人に乏しからず、而も政治の實際に對しては、何等の益なし、深く民情に察し、國勢に稽へ、行ひ難き理論を避けて行ひ易き方便を辿る之を達見達識者と謂ふ、安達も岡崎も共に實際家であつて空論者でない、至難なる理窟を捏ね廻はすばかりが、決して達見達識者でない、其の難かしい理論を平易に解いて一步步理想に近づかしむる處に實際政治家の手腕を存す。

安達謙藏は理論的政治家でない、實際的政治家である、人或は安達を評して、局量狭少の小策士なりと罵る、是れ彼の四半面を觀ての妄斷だ、一寸見た處では、瘦こけて神經質家らしく、風采又堂々たらず、寔にコセつき屋の觀あるが、若し仔細に全豹を窺つたならば、天空海濶の氣象を見出すに難からず、彼は政治家として責任觀念の最も強い人物である、部下の失策は、無論一身に背負こむを辞せない、部下を殺す前に先づ自分を殺すを覺悟して居る、想ふに一省の主腦者は、大綱を統ぶれば足る、信じ

て疑はざるは、彼の部下統御法だ、遞信の事務は恐らく一切部下任せであらう、故に部下亦信任を辱かしめざるやうに奮勵する、彼は實に人を御するの術を心得て居る、假令彼に心服せざるものも遂には心服せざるべからざるに至るのだ、人の心を收攬するを英雄とせば、安達謙藏は近來の英傑である。

### 本家歸りの道廳長官 中川健藏

北海道は中川長官に取りては發祥の地である、北海道廳は彼に取りての登龍門である、斯く深き縁故を有するに於て、本道は彼が官吏として故郷でありと言ひ得る、勿論産れ故郷は佐渡が島根であつても、今日地方長官の首位を占むる、北海道廳長官に出世したる搖籃は、即ち本道であるのだ。

懐かしき故郷、其れは北海道であらう、彼が官人として有爲の人材であることを認識

されたのは確かに道廳參事官時代である、爾來各府縣に歷仕し、昇進して縣知事となり、次で道廳長官の名譽を荷ふて、元の舊巢に立歸つたのだ、這般の事情を平易に解説すると、各府縣に出稼した北海道の獨息子が、錦を着飾つて本家歸りを遂げた形である。

中川君が如何なる人物であり、又如何なる手腕を有するかは、彼が難治の聞へ高き、熊本縣知事として、大過なきのみならず、巧みに縣民の心を捉へ、縣民の信望を繋げることによりて證明される、想ふに彼は良二千石中の良二千石たる名譽を失はなかつた、是れ固より事に當つて、公平無私の態度を失はぬからであると信ずる。

役人の相場は、彼の米相場の如く、時と場合に依りて、亂高下するものにあらず、一定の相場が建てられ居ると見るが順當であらう、熊本縣で有爲の人物は、北海道に於ても矢張り有爲の人物と信じたい、記者は衷心から左様に信じてゐる、道民は記者と所感を同ふするだらう、想ふに彼は二十年前の北海道と、今日の北海道に對して如何なる感想を抱くであらうか、若し其の開拓が長足の進歩なりと、驚異するならば、中

川君の抱負のほども大概は推せられる、従つて第二次拓殖新計畫についても、熱度の昂低が測量される、赤ン坊も三年たてば三つになる、成長もし發達もするのは當然だ、況んや中川君の心に浮ぶ北海道は、訣かれて以來茲に二十有餘歳の青年に成長したるに於てをや、其の成長したりと褒むるは、是れ只一片の辭令に止まり、心の中ではモット進歩しさうなものだと不足に考へて貰ひたい。

北海道を大觀すると其の拓殖は遅々たりである、決して長足の進歩とは過賞し能ふまい、固より原始時代に比すれば、拓け居るに相違なけれども、其れは程度問題である、實際約六十年の歳月を費して、人口僅かに二百五十万を包擁する程度の拓殖は、鈍歩の進歩である、のらりくらの牛の歩も休まなければ千里の遠きに達し得んも、本道の拓殖は左様に氣長なるを許さない、極めて氣短かなるを要す、其短氣ならんことを中川君に註文したい、罷り間違つて中央政府から、ヒステリー役人と誤られても、毫も介意するに及ぶまい、本道民の望む處は、活馬の眼を抜き兼ね間敷さ、鋭感な輕快な、ヒステリック長官だらう。

彼は來客に向つて「本道は私が官吏として、生ひ立つた處であつて、其の生立つた私  
が襤褸の地に歸つて來たのである」と、是れは一片のお世辭でもなければ飾辭でもな  
い、詐りなき真情の流露である、と記者は信ぜざるを得ない、交際術に長けたる腹黒  
の役人は、往々口から出まかせの飾辭を放つて、人氣を取らんと試むるものなきにあ  
らず、併し眞摯極まる吾が中川長官は、北海道を己が家と心得へ居るのだ、多年外遊  
したる息子が家に歸つて家督を相續したると同様の感じを持つに相違あるまい、既に  
此の心あり、道民に對して、眞の親しみあり、道治に對して、眞劍味を帶ぶることが  
出来るのだ。

由來官人の通弊は、官權を笠に着て、横柄に構へることである、小利口な役人になる  
と、舉動に現はさぬにしても心の底には、威嚴めしき官權を着て威張る、其處で官尊  
民卑の不都合な熟語が作らる、是れが第一の弊である、官人の位地は浮雲の常なきが  
如し、政府の都合次第で、東西南北に流轉する悲がある、極端に言ふと、一定の住所  
なき浮浪人と同様である、故に浮草の異名が附せられてゐる位だ、既に浮雲の位地に

立つを以て腰が据らず、凡てが浮調子である、浮いた稼業は、常に藝妓のみでない  
云ふことになる、其の仕事も當座凌ぎ、實の入らぬこと夥しい、治績の擧らぬのは己  
を得ない、元來官人を汚れ褌を取り代ふる如く、難作なく取り換へる、是が第二の弊  
害である、尙幾多の弊害を算ふるに違あらざるも、是等は弊害の重なるものである、  
吾が中川長官の心事を察するに、斯る弊害に染まない、彼は民選長官の氣分で居るや  
うだ、故に官臭なし、其の官選長官にして、民選長官の覺悟を有する處に、敬すべく  
親むべき點が発見されるのである。

民選長官の氣分を有する、中川氏を長官に戴くことを得たるは、北海道の幸であり、  
道民の福である、道治の擧がることは少しの掛念あるまい。

吹くたびにいや珍らしき心地して聞き古るされぬ軒の松風

夢の中に夢と思ふも夢なれば夢を迷ひと云ふも夢なり

雲よりも高き處に出て見よ暫しも月にへだてあるやと

(夢窓國師)

## 立憲政友會顧問 代議士 東

武

何れの政黨にも勢力争ひがある、黨中黨を樹て、互ひに睨み合つてゐる、云はゞ兄弟喧嘩のやうなもので、何等珍異とするに足りないが、餘り度を過すと、遂には氷炭相容れざるが如く、分裂の結果を觀るやうな悲みが生ずる。

本道の政情を解剖すると、随分珍異な現象を發見するに難からず、如今政黨に自然淘汰あり、残るは憲政派に、政友、政本の三大派だ、既成政黨の打壊を目的とした、犬養君の革新俱樂部の分家もあり、賢明なる助川貞二郎君が、分家を宰領して、政界革新の急先鋒たる任務を完ふすべく、種々企畫する所があつたけれども、本家が政友會に嫁入りしたので、自然消滅、助川君も亦其の雄志を遂ぐるに及ばずして、政友會に入籍した、實に惜しい事をしたもんだと、助川君の壯圖を知れるものは口惜がつてゐる、併し助川君は鶏口となるも牛後たるを潔しとせざる人だから、時機到來さへすれば何等かの方策に出づべしと觀測されてゐる。

本道の三大政派、而して各自勢力の主持については、憲政派は論外として、政本兩派について講究しやう、昔から本道の政友派に二大勢力が、横流するを認められて居た其の一は即ち政友會の顧問東武君で、他の一は即ち政友本黨の重鎮中西六三郎君である、現今は互に敵味方に別れて、旗鼓の間に見ふる敵同志であり、黨勢の攻防に餘念なきは勿論であるけれども、其の同じ政友會員として、同じ鍋の汁を吸ひ、同じ釜の飯を喰ふ時分から、兩氏の勢力は互に衝突すべく己を得なかつた、何故に衝突すべからずして衝突したかと云ふ點につき、深刻なる論評を試むるの餘裕を有しない、先づ衝突してゐたこの事實を説明すれば其れで充分である。

兩氏共に道會議員たる時、同じ中間の道會議員等は、東派と中西派に分れて、吳越の觀を示した、内輪喧嘩は元來犬も喰はぬ醜態であり、其の結果が道治に故障少なからずと見て取つた識者は、屢々居中調停の勞を取つたけれども、常に辛勞損の草臥儲けに終つた、尋で代議士選舉にも、猛烈なる同士打を始めて、政黨本部を手古ずらしめた痛恨事もあつた、斯の如くして、兩氏勢力の角逐は、停止する能はず、惹いて今日

に及び、遂に手を別ち、東西に分れて所屬黨派の袖領たる、樞要の位地を占めてゐるのだ。

東武君は立憲政友會の顧問である、顧問の位地は重要なもので、大臣たる器のものでなければ此の位地を汚がす能はざることは、今更ら廣告するに及ばぬ、故に東武君は正に是れ政友會私設内閣の大臣格たる譯だ、やがて政友會が志を天下に得る時、彼は大臣の椅子に座するを失はぬだらう、其の伴食たる否とは、固より問を要しない。記者は本道から、東武君の如き、國家棟梁の材を作り出したるを、衷心から歡ぶ、且つ本道の名譽と叫びたい、東君に慊焉たる連中は、記者の批評を耳にし、左様なると大臣の相場は、舊に比して甚だ下落すると半疊を入れるだらう、併し云ふ者は新時代を知らぬ守舊頑陋の徒たるを承知して貰ひたい、其の舊に比してと云ふ、其の「舊」なるものは、伊藤、山縣全盛時代を顧みての事であらう、勿論當時の大臣等は、立派の人物だつたに相違ない、だが環境がごとく馬鹿の寄合だつたから、彼等が特に卓出してエラさうに見へただけだ、所謂鷄群の一鶴たる、窮屈の位地だつたからだ、天

下人材多し、もとより彼等の獨占すべき限りでないが、多くは「閥」に遮ぎられて、有爲の人材の出場を塞いで、顔出し得せしめなかつたのだ、今日は「閥」の關門が打壊され、人材の門戶開放となつてゐる、其れでも未だ野に遺賢なしと満足する迄には徹底しないが、今日の人材を取つて、伊藤、山縣全盛時代の人材に比す、少しも人材の相場下落を嘆ずるに及ばぬ、若し東君をして藩閥の爪牙たらしめたならば、佐野常民位の役目は、遺憾なく勤まつたであらう。

政友會の天下たらしむることについては、顧問たる東君は慎重の用意なかるべからず天下取りの途は、絶對多數黨の位地を占むるにあるは餘りに明白だ、如何にして優勝の地歩を占むべきか、要するに我吾を恃む外あるまい、然るに世には、自力に依らずして、他方に頼らふとする、このズルイ考へが政友會に存する間は、決して志を天下に伸べ能ふまい、政友本黨と合同を策するなどは、他人の恵に依らんとする一時の權略で、永遠の大計であるまい、斯様な權道は決して踏まぬが可い、餘りに成功を急ぐと或は恐る、頓でもないドジを踏まんことを。

既成政黨は、豚の醜團である、如何に言譯しても、政權が無上の好物である、政權に離れて政黨なしとは、餘りに現金な言分であるが、之が少しも掛引のない處だ、政黨屋が何時でも聲明する、國民的政治を行ふは眞赤な偽りで、野に在りて叫ぶ國民的政治は、朝に在りては非國民的政治である、現に無産階級の福祉を除外して、有産階級の御機嫌を伺ひ過ぎてゐるぢやないか、是れ獨り政友會許りでない、憲政會も其の通りである、賢明なる東君、固より篤と御承知の筈と思ふ。

政治家に貴ぶ處は、終始一貫の氣節だ、其の最も賤しむべきは、風の吹き廻はしによつて節を二三にする事だ、當にならぬ人間は、世間に通用せざる如く、當てにならぬ政黨も、當にならぬ政治家も、國民から指彈される許りだ、東武君の政治家としての經歷は、終始一貫してゐる、政友會と浮沈消長を共にしてゐる、決して臨機應變黨でない、極めて當になる人物である、此の點が東君の價值の存する處である。

政友會の全盛は、久しい間續いた、其の黨員たる者、特に東君の如く一黨に重を爲される人物は、得意絶頂に達して、鼻息甚だ荒からざるを得なかつた、獨り驕る平家久

しからざる、變遷の自然理を諒解せる東君は、衆愚のやうに有頂天にならなかつた、此處が彼の遠慮深謀の存する處だ、得意になればなる程、失意に處するを忘れなかつた、故に一たび失意に陥つて驚かず、悲まなかつた、常に天空海濶の度を示して、悠悠々寛々たり、超凡脱俗の傑物にあらんずんば、焉んぞ能く斯の如くなるを得んや。

黨勢を擴張して天下の第一黨たる威を示す、之が政友會員としての彼が窮極の目的であらねばならぬ、併し從來政友會の黨勢擴張の跡を察するに、随分腑に落ちぬ點が多かつた、其の手段方法は、拙悪を極めたけれども、是れは各政黨共通の弊害であつて單り政友會のみを責むる譯に行かない、其の目標とする處は、僅々三百万の有権者の争奪に外ならない、勿論來る者は拒まず、何人にも門戸を開放してゐたけれども、花よりも團子無権者よりも、有権者がより多くの好物と歓迎欸待されたるは、現に見る事實だ、是では國民的政治を施さうとする、大趣旨に副はないのは言ふまでもない、然るに普選の實施を眼前に控へたる今日、政友會の黨勢擴張の方針が、普遍的に擴大されたことは何寄結構である。

各政黨とも、一般國民の同情を惹くことに苦心してゐる、多數國民の意を迎ふるに足る、政策を探がしてゐる、其がため地方民の負擔を軽減するに足る、税制の整理を企て、居るのである、政友會の整理案は地租委讓を眞先として多々ある、租税の体系を正し、地方税制の改革に及ぼして、地方人士の負擔を軽減する策は、確かに地方民の冀望に適するに相違ない、特に農村救済に向つて注ぐ政策は、立憲百姓黨とまで異名されたる政友會本來の面目を躍如たらしむ、實に東君は立憲百姓黨の總務として、黨勢の擴張に努むるのである、近來著しくブルの氣分を脱して、プロの色彩を濃厚ならしめつゝあるは、誰れが眼にも映する處。

今日の政黨は三百万人の大衆を對手にしなければならなくなつた、如何にして此の民衆を率ふるかが問題だ、其れには立憲政友會と稱する大商店は、他店よりも優良の品物を取揃ふるに限る、民衆の嗜好に投ずる品物さへ販賣すれば、蟻の甘きにつくが如くなるは必定だ、而して各地方に行商さへすれば、販路は自然に擴張されるは火を賭るよりも明かなりだ、特に昔し露國の大財産家ウキツテが採れる、國家專賣法を模擬

するも一策たるを失はぬ。

賢明なる東君は、普選に處する途を、慎重に考慮してゐるやうだ、彼は大風呂敷を擴げて一切の民衆を包み込まうとしてゐる、各地の農民は言はずもがな、所住の在郷軍人分會から、青年會、從來餘り縁の遠い各労働團體、而して特に注目し値するは、各寺院と婦人會を自家藥籠中に收めんとすることである、是れ實に妙策だ、佛教徒を自家の味方に引き入れることは偉大なる勢力を加ふる譯である、若し其の思ふ壺に箝まり佛教の力を借用し得なば、政友會の勢力は隆々たりである、本道について見るに東君は確かに「眞宗」と、既に一條の氣脈が相通ずると信する理由あり、他に先鞭をつけて先づ「眞宗」を捉へ、次で日蓮、禪、淨土其他各宗門に及ぼさうとする、東君の志は、寔に遠大である。

婦人は大なる潜勢力を有するに於て論なし、然れども我國の婦人は、未だ其の力を政治上に應用しないと見て可なり、今日は未だ婦人參政權を有せざるためならん、勿論今日の政治は、男子のみの政治である、婦人は政治上の無能力者としてある、如何に

普選／＼と難有がつても、其れは男子に對しての普選である、女子に差別待遇を施す制度は固より跋足たるを免れないが、何れは女子も男子同様、政治上の能力者と認められる時機が到來するであらう、故に女子に對しても政治的訓練を與ふるは、心ある政治家の執るべき當然の途である、東君は決して婦人の勢力を除外しない筈だから今から此の勢力の支持に勉むるであらう、彼の遠大の計は恐れ入つたもんだ。

東君は一見武骨らしいが、深く研究すると、大の優さ男で、艶聞の一つや二つ位の持合はせないとも限らない、ズット以前に遡れば、赤フン事件を捲起して、令夫人の逆鱗に觸れたこともある、若い時分の陸奥宗光が、浪華住吉三文字茶屋の仲居のお末と申す別嬪と「未は袂をしぼると知らで、濡れて見たさの夏の雨」と云ふ仲となつた通り、西の宮の座敷廻と、しよんぼりぬれ幕を演じたこともある筈、東君も陸奥君に負けず、何とか云ふ都々逸を作つたさうだが、其の文句は、多分取持役の木下太閤が知つてるだろうと思ふ、餘事は措き、東武君が政友會に有する勢力は大いしたもんだ、是からが旭日の昇る勢を示すだらう。

東君が多大の勢力を政治界に扶植し、之を維持し、今後益々増大せんとするは、群衆心理を捉ふるに巧みなるにも依るであらう、多く取つて多く散ずる、金放れが奇麗でケチ／＼せざるにも依るであらう、併し彼が北海タイムスと云ふ、偉大なる機關新聞を有するに依ることを忘れてはならぬ、彼は言論の雄と稱揚されるほどの雄辯家だ、一たび演壇に起てば、聴衆をチャームするほどの魔力を有してゐる、其處へ加ふるに能文家だ、演説と文章——舌と筆——の兩刀使ひ、自家の運命を推開し、自家の勢力を扶植せざらんと欲するも、豈夫れ得べけんや。

彼は新聞記者としての成功者である、經營最も困難なりと稱される新聞事業をば、彼は無造作に仕上げて今日の隆盛と來した手腕は、何人も感服せずには居られまい、現時我國に於て、新聞事業の成功者と見るべきは、大阪に大阪朝日の村山龍平あり、大阪毎日の本山彦太あり、東京に國民新聞の徳富蘇峰あり、けれども前二者は文章の人でない、只經營一方だ、獨り蘇峰に至りては世界の文豪たり、而して經營を兼ね、文豪として、又經營者として、兩天秤に擔ぎ得るもの、我が新聞界には稀れである——



尤も下手の上手はあるけれど——眼前に東君あり、徳富蘇峰の後影を拜し得るは確かである、若し彼にして實際政治家たらんとする願望を絶ち、一意専心、文章を以て世に立たば實際政治家を動かすだけの筆は優に運べるものと信ずる。

彼は日夜新聞政策について肝膽を碎き、腦漿を絞つて居る、彼の強敵と目するは小樽新聞でなければならぬ、此の強敵を征服することに、少なからぬ氣苦勞してゐる、之を征服するには、破天荒とも云ふべき計畫を樹つるの必要がある、尋常一様の手段の能くする處にあらざるは百も承知の處である、故に常に譲らざる競争を試みてゐる、早い話が紙幅も同じく十二頁制を採つてゐる、附録も同じやうに附ける、夕刊も同じやうに斷行する、競争に一步先やうと苦心してゐる、處で新樽が競争負け、新聞政策負けの觀あるは、例の國産振興博覽會の大計畫だ、實際北海タイムスの此の大計畫は、樽新の夢想だもしなかつた處であらう、若し夢想も幻想もなし居れりと負惜みを言つても、樽新は正しくタイムスに先手を打たれたことは認めぬ譯に行くまい、何十万圓と言ふ資本を抛つての大仕事、良し左様な考へが浮んだからが、實現は難事であ

る、其の難事を爲し遂ぐる處に、東君の非凡の手腕が現はれる、實に東君の計畫は高遠だ、畫く處の輪廓が極めて大きい、彼は筆の人なるのみならず、策の人である。

博覽會の成功は疑ふ餘地がない、假し物資上には多少の損失を招くとしても、新聞政策には成功だ、國産の振興は、斯くて期待せられる、特に況んや、北海タイムスが北海道民に代りて、大仕掛の博覽會を企て、北海道を内地未見の人に紹介するだけでも本道の拓殖に一新生面を開き、一進展を劃する利益は確かにある、此點は道民が深く北海タイムスを徳とし、深甚の感謝を拂ふであらう、感謝は即ち同情の結晶であるとしたならば、北海タイムスの販路は自然に擴大せられる、想ふに北海タイムス這般の壯舉は、確かに新聞政策の成功である。

新聞紙自体の信用、威力、勢力は、必ずしも紙幅やページの多少に基かない、紙面内容の充實が主たらざるべからず、徒らに紙幅の大を誇る勿れ、徒らにページの多きを矜る勿れ、紙幅如何に大にして頁數多きも、内容の充實せざるに於ては、反古紙と何ぞ擇ばん、果して然らば、信用何處にかある、威力何處にかある、勢力何處にかある

要は死せる新聞に非らずして活きたる新聞を作るにあり、彼の四頁のフランクフォード紙が、倫敦タイムスと對峙し得る勢力を持するは、何故なるやと深く研究するを要す、其はフランクフォードが生氣潑瀾だからである、一世を指導し教養するに足る記事を満載するが爲なり、新聞を作らんが爲めに書くにあらずして、經綸を行はしめんが爲に書くことを忘却してはなるまい、斯くて反古紙の誹より免かれるを得ん。

### 本道政界の風雲兒 木下成太郎

嘘八百を真としやかに並べ立て、座客を煙に卷くのは、大隈重信の特長であつた、斯くて大隈の大風呂敷と云ふ言葉が製造された、彼の度胸は廣大だ、日本は愚か、全世界を一個の風呂敷に包み込もうと試みた、世界を我物顔する處に大隈の横着な處があつた、實にもだ、須彌山に腰打かけて青空を、笠に被れど耳も隠れず、と誰れかゞ形

容した巨人は、彼大隈に適用すべきである、故に世界の偉人の中に指折り數へられるに至つた。

大風呂敷を擲げて、客を煙に卷く點に於て、吾が木下成太郎は、大隈と稍々相似たり若し一夕本道政客を選んで座談會を開いたならば、彼は確かに特優等の名譽を擔ふ一人だ、彼は滿身策の結晶と謂つて可なり、大小の籌略は機に臨み、變に應じ、汎湧して滾々と盡くるを知らない、加ふるに度胸もあり、勇氣もあり、お負けに人一倍慈悲深く、巧みに群衆心理を捉ふるに妙を得たり、蓋し立派な大正の大親分株であらう。世か世ならば、疑もなく一國一城の主である、立派な幡隨院長兵衛である、若し中央政界に志を恣にせしめたなら、岡崎邦輔位の役目は結構勤まると思ふ、岡崎は自力もあるが、其の今日あるを致したのは、陸奥宗光の餘光に依りけりだ、獨り木下成太郎は、他の恵に頼るを潔とせざる、自力一點張り、卓立特行の男だ、若し先達の推輓を辱ふしたならば、何時までも北海道あたりに、燻ぶり居る人物でないことは、今更クドクしく裏書するまでもない。

ズーッと以前の總選舉の際だつたと記憶する、俵長官が頻りに憲政派に色目を使ふを不都合千万なりとあつて、怒り心頭に發し、急ぎ東上して政友會本部に「駐込み訴」を提起した、時の選舉總督江藤哲藏之を聞いて、睫を吊り上げた、恰も俵長官の滯京を幸ひ、江藤は木下を伴ひ、築地の某待合に陣取り俵を呼びつけ散々油を絞り、キュー／＼の目にあはしたことがある、流石の俵も江藤の威に打たれて、ブル／＼と縮み上がつたさうだ、此時の木下の高飛車は夫れは／＼千兩役者も出来ない手際であつたとは、江藤が記者に語つた極秘の内所話であつたのだ。

策に正と奇とあり、宛かも碁に定石と變とあるが如し、木下が圍碁を善くするや否やを知らず、其の知らずと雖も、岡目八目の筈碁の仲間たるに恥かしからぬ位の智識は備へ居ると解する、大目、小目、目外れの陣立、一二三間挟みの法、さては大桂馬、附込、跳込等の戰略を解するに相違ない、想ふに木下は正策に長ずる、而も奇策に至つては、更に最も得意とする所である。

策の萬全を期するは、獨り成太郎に止まらず、何人も左様である、遺算は何人も嫌ふ所だ、神ならぬ人間、時に一失なきを保し難い、奇策縦横の成太郎、大臣大將を親友扱にする彼とし、河童の河流れもある、弘法の筆の誤りもある、野猿が木から落つることもある、偕て此の一失あるが故に、成太郎の策士たる估券は傷つけられない、若し小過失を捉へて、愚策者なりと罵るものあらば、其れは甚だ殘酷である、現在の政支部役員中恐らく彼ほどの策の所有者は見出されまい。

前の總選舉に際し、彼は策の萬全を期し得なかつた、其の結果が選に落ちた、是れ恰も猿の木から落ちたと同様だ、之には理由がある、彼は選舉區の大勢を見誤つたのだ、彼は飽までも優勝者たり得ると信じ、三軍の士氣大に驕つた、飛出のもの、奥野小四郎を小僧と侮つたのが抑も失敗の因である、既にシマツタと氣がついた時は最早や遅かりし由良之助だ、判官は切腹した跡の境遇であつたのだ、氣驕れば隙が生ずる、此の隙に敵が根深く喰ひ込んだ以上は、之を撃退するは容易の業にあらざるからである、記者が殊更に成太郎の、過去の失敗談を繰返したるは、驕兵は敗ると云ふ半面の眞理を、忘却せざらしめん婆心に外ならぬ、今や多額議員の選舉の競争は、白熱化して來

た、各派の謀士、最善の策と力とを費やして、乾坤一擲の勝負を争ひつゝあり、土俵際の小手投を喰ふ虞れあるを信する故に、格段の注意を促すのである。

政友派の雜帶陣笠は、吾黨優勢なり、吾黨の候補高橋直治の當選確實なりと聲言するを、記者は甚だ不思議に思ふのだ、固より雜輩の聲言、成太郎は必ずしも相槌を打つほどの愚物であるまい、人は言ふ、小熊翁函館に起てる結果、憲派の金子は、卒然として危険に陥ると、是れ實に誤解である、思はざるの甚だしき誤解である、今日に於て金子の當選を奪ひ去るの至難なるは、成太郎の選舉區から、小池仁郎を追ふよりも難きを知らねばならぬ、若し之を知らずして策を樹つれば、其の策は即ち遺策である受くる處の打撃は、政友會最も多し、是れ成太郎の慎重に考慮を要する處だらう。

成太郎は豪放磊落の人である、些事に齟齬しない、寔に豪傑の風格がある、併し其は神經經敏性を、豪放磊落の表皮を包んで居ると觀察する、何事も遣つ放しに似て、其の實は小心翼翼たるからだ、イヤ小心ではない、用心堅固であるからだ、其の克々敏感なるが故に、打てば忽ち響く、響いたら直に活躍する、是れ世の鈍感者の遠く企て

及ばぬ處。

何う考へても成太郎は、變り者である、彼の智慧は世界的に冴へると謂つてよい、特に東洋問題に就ては、常に深甚の注意を拂つて、良法を講究してゐるのだ、少なくとも東洋人の文化を進め、而して全亞細亞を聯盟せしめ、日本をして之か盟主たらしめん意志を窺ふに難からず、既に彼の意は亞細亞聯盟にあり、其の志や甚だ大なり、敢て北海道の局部に屈託するを欲すまい、此の目的を貫くために、東洋人の文化教育を企畫したのである。

何を爲すにも、教育が基本だ、東亞の聯盟は、東洋人の自覺を促がすが先決問題だ、自覺を促がすための文化教育、舞臺は甚だ大きい、之を措いて他に良法あるまい、好い處に氣がついた、其處で同じ變はり者の大木遠吉を説いて、表看板の役を押つけ出来上がったのだ、東邦文化協會と銘打つものだ、之には朝野の識者、誰一人異議を挾むものあらうはずなく、會務は順調に進んで、隆盛を極めつゝあるのだ、小さい北海道での争ひは、所謂蝸牛角上の小ぜり合ひだ、大きく東洋を相手とする處に、成太

郎の大閣式雄圖が窺はれる。

思慮深き成太郎は、事を企つるに卒爾ならず、常に完璧の計を樹つる、長い道中には時に浮沈消長あり、苦あり、樂あり、而も窮極の勝利を期す、例せば家を建つるにも然りだ、十年計畫で、今の邸宅は建あがつた、久しい間、雨ざらしの不憫に遇はせられたのだ、過ぐる年のことである、會長の大木伯が、事業の宣傳に來札したときの講演に大分時間があるので、其の間の退屈凌ぎに成太郎の新邸宅に請じた、無遠慮の伯爵は、成太郎を顧みて曰く、貴公の家には疊が敷しいてあるかい」と、流石豪膽の成太郎も、此の一言には悉く恐縮して、顔を赤めた、傍人揶揄すらく、成太郎の紅顔の美少年に化けたのは、初めて拜見したと、伯遠吉は決して悪い氣で言つたぢやない、彼に同情する親切心から思はず、知らず口を突いて出た善口である。

邸宅が立派に出來上がつたので、二百疊が入用となつた、某疊屋に入念に新調すべく手金五百圓を渡した、數日後至急金子の入用が起り、疊屋に泣付いて手金を取り返したので、家あつて疊なしと謂ふ消息を、誰からか聞かせられたことを、伯遠吉が委細

承知して居るからである、成太郎が些事に頓着なきは、之を推して知るべし、彼の美德は失敗しても決して怨まぬことだ、愚痴をこぼさぬことだ、如何に泣言を並べても取り返されぬことを悟つて諦めるからである、今や彼は高橋候補の參謀總長として、最善を盡しつゝあり、記者は計畫圖に當りて好成果を收めんことを信じた、果せる哉選舉の結果は、金子の壘を摩するほどの高點で當選した、是れ一に成太郎采配の宜しきを得たからである。

## 本道政界の大立物 中西六三郎

明治維新の大業は、大西郷や木戸松菊、果ては大久保甲東に依つて遂げられた、故に彼等は維新の三人男として、世に謳歌されてゐる、併し彼等の成果は、幾多の英傑が血を流がし、骨を刻んでまいた種子の生産物を刈り取つたまでである、王政復古が、

政治を神武創業の昔に立返へらしたのには、彼等三人男の獨力であらざるは勿論の次第である。

維新改革の種子をまきしもの、導火線となりしもの、數ふるに違まない、是には幾多無名の英雄が居る、藤田東湖あり、佐久間象山あり、横井平四郎あり、吉田松蔭あり、橋本左内あり、頼三樹あり、坂本龍馬あり、高杉晋作あり、久坂玄瑞あり、而して天皇に帝王の學を進講し、補弼の重任を竭したる、元田東野あり、故に維新三傑の勳績を稱揚すると同時に、幾多有名無名の英傑の、苦心努力の偉大なるを偲ばねばならぬ和歌の浦には名所がござる、一に権現、二に玉津島、三に下がり松……是れ三十三間堂の義太君に教はつた文句だ、此の木遣節で、柳の精が浮かれ出したとある、又其の昔、ズーと大古の神代には、天照皇大神が赫怒ましまして、天の岩戸に閉籠り給ひ、一朝にして天地晦暝咫尺を辯せず、諸神大に驚き、歌舞音曲の精妙を盡す、大神心合らぎ竊かに岩戸の扉を寸開して覗き給ふ機會に、手力雄命が大力を揮つて開扉し、茲に元々通りに、天地快明となつたと傳ふ、本道にも名所ならぬ、名物男が御座る、本

道の政界を開拓した功勞者に乏しからず、而も前人が開拓した功績を私して、果報者たるを得たるは、何人であらうか。

本道政界に於ける果報者を探ねて、三人を發見した、曰く、中西六三郎君だ、曰く木下成太郎君だ、曰く東武君だ、世人は彼等を稱して、政界の三人男と崇め奉つる、三人各々特長あり、特短あり、強いて三人共通の特長を探めなは、其は性慾の旺盛なる所であらう、全く其の通りだ、三人男の趣味は「女好き」と云ふ點に一致して居るが、此等は餘り饒舌らぬ方が宜からう、東君の赤フン進上事件の如きは、恐らく何人も學び能はぬ愛嬌だからだ。

三人男の尊稱を奉られて、彼等は決して自惚るべからず、見渡す限り草茫々たる荒野原だ、其の荒野の真ん中に、鶴が三羽聳立す、其の鶴は即ち拙者なりなど、慢氣を生ずべからず、假りに鶴と定めても、其れは鷄群の三鶴と云ふに非らざること、返すくも注意する、彼等は決して沐候冠者にあらず、獨活の太木、風吹けば倒れる的の人物にあらず、世人は間違つても、左様な無禮の考へを起してはならぬ、如何に割引

しても、木遣節の音頭取りである、手力雄命の格式を有する、若し木下成太郎を、豊臣大関と見立てなば、東武君は蜂須賀小六である、而して中西六三郎君は石田三成である、と云ふものあり、併し之はチト穿ち過がない見立方だ、彼等三人男は矢張り本道政界の立看板たる位地と名譽を失はない。

六三郎は相當の學問あり、思慮分別あり、而して善謀の士である、世の識者が彼を石田三成に擬する、當らずと雖も遠からざるやうにも見ゆる、三成は豊臣家のために謀りて忠實であつた、其の秀頼を擁して秀吉恩顧の諸侯に號令して、天下分目の大戦を製造した、不幸にして一敗地に塗つて身を亡ぼし、豊臣家も顛つたのである、識者が彼を擬するに三成を以てする所以は、政友會の改造を企て、分裂の己むなき手段を取つたからであらう、政友會分裂の張本は、中西六三郎張本なりと謂ふは當らず、而も改造派の急先鋒たりしと云ふことに於て、甚だしく中西六三郎君の献策や奮闘を要したるは、何人も否定し能ふまい。

彼は辯論の雄である、議院に於ける彼の辯論は、寔に珍とするに足る、一言半句も駄辯を費さず、條理井然として、一絲紊れず、正々堂々の論陣を張り、敵をして顔色なからしむ、一言にして彼の辯論を評せば、莊重深嚴、國士の風あり、所謂「演說使」の辯論と同一視すべからず、是に於て記者は、彼の雄辯は我が議會の誇りとして、少なからず敬意を表した。

何故に彼の辯論に千鈞の重みがあるかを問ふまでもなく、其の人にして此の辯論あるからだ、苟も其の人にあらざるもの、雄辯は、所謂「演說使」の巧妙なる寢言に過ぎない、輕せられるは當然である、彼は政友會にありても、政友本黨にありても、議會の闘士である、常に黨の總務又は顧問の重位を占む、千羊の皮は得易く一狐の腋は得難し、斯の如く重要の人たり得た徑路を略叙せねばならなくなつた。

蛟龍は靈物だ、一たび雲霧を得ば、忽ち乗じて空中に飛躍す、其の雲霧を得ざる間はドブ鼠と何等擇ぶ處なし、浮世は儘ならぬと言ふのは此處のことだ、千里の馬も、伯樂の知遇を得なければ、遂には糟櫪の際に斃死する外なし、想ふに中西六三郎の爲め伯樂となりしものは、今は故人となつた、江藤哲藏である、江藤は憲政の安達謙藏と

共に、選舉の神様と崇められた人間だ、兩人とも熊本の産物で、昔しは共に「馬鹿藏」と異名されたほどだが、ドーして〜議員選舉の智識、駈引、策略は、選舉の神様と呼ばれるほど巧妙であつた、されば江藤は、原總裁に抽んでられ、確か野田卯太郎の後を襲いで、政友會幹事長の重荷を背負せられた、此時だ中西君を抽いで、幹事の椅子に据へたのは、中西君一たび幹事に列して、有らん限りの智慧をいぼり、有らん限りの手腕を揮ふた、遂に非凡の人物と云ふことが判つて、今日の位地に叩き上つたのである、六三郎の今日は、雲霧に乗じた蛟龍である、斃死を免かれた千里の馬である六三郎君とて江藤の推輓の功を空ふする譯に行くまいと思ふ。

江藤哲にせよ、安達謙にせよ、選舉の神様などと、過分の讃辭を浴せられて、本人共は定めし痛み入つたのであらう、まこと智慧の分量を秤ると、普通人に比し、其れはと遠い差はない、固より神算鬼謀と云ふのでない、只其の部分的の智慧が衆に比して幾分垢抜けしたるに過ぎないのだ、看よ、彼等兩人の選舉の虎の巻と稱する、手品の種子を看よ、誰からも選舉術の極意皆傳を譲られた譯でない、多くは自修自得の産物

である、併しズートト根源に遡つて、お師匠さんを探したならば、其れは疑ひもなく「孫子」である、其の極意とする所は、彼を如り己を知る一事に歸着する、彼等が選舉通と稱せられたるのは、敵の實力を精調して誤らず、敵の策略を探討して裏をかくこと巧みなるが故だ、何等造作のなき話である、中西六三郎は江藤に師事して江藤流の選舉學を窮めたはずである、其の免許皆傳を譲り受けたるや否やを審かにせざるも、大に會得した筈である、併し前年の總選舉に上川方面に於て、東君と戦つて慘敗を招いた處から推すと、何處かに抜けた處があるに相違ない、即ち其の失敗は詰り敵を輕じ己れを重じた罪に歸せずばなるまい、孫子は言ふた、戦はずして人の兵を屈し、攻めずして人の城を抜くを用兵の上手なりと、其の一兵に血塗らず一彈を費さず、而して勝つことは濡手に粟のつかみ取りと言ふもの、併し此の濡手粟の戦術は、彼には分不相應である、だが敵の策略の裏をかく位は、別して難事であるまい、けれども敵の裏をかく前に敵に先じられて裏をかかれぬ工夫を凝らさなければなるまい、之が先決問題だ、不意打を喰つて、陣營を混亂状態に陥らしめるやうでは、百戦百敗は保險付



である、事實は彼自身の選舉についてのみならず、多議を争つた大瀧君の失敗が證明して居る。

中西君は漢學者而して文章を能す、深淵な學理を、漢文直譯体に書き綴らしむる技倆に於て、到底東君等の企て及ぶ處でない、況んや木下大閣に於てをや、彼の手も八丁口も八丁と云ふことは、吾が六三郎君について言ふのだらう、其の漢學者たる彼は、孟子の所謂天時、地利、人和の解釋が、實際に適用しないやうだ、例へば大瀧君の互選競争について看るに、大瀧の立候補は天時を得、地利を得て居た、只人和を終局まで保ち得るや否やが疑問であつた、中西君は保ち得るものと信じたに相違ない、是が抑もの大遺算であつた、固より人の心理を看破するは至難だ、併し看破し得られる方法もあり、必ずしも千里眼を借用するに及ばない、昔關ヶ原の決戦に金吾中納言の裏切りを豫知して之に備へたるは、大谷刑部だ、若し中西君にして、大谷刑部の眼識があつたならば、自分の選舉に對しても、亦大瀧君推薦者の嚮背が豫知されぬはずがないのだ、知らずや、反問苦肉の計は、盛に敵人に依りて企てられ、蘇張の徒、亦盛ん

に人心の惑亂を企てた、其の結果は面從腹背の理を悟る能はずして敗れたのだ、孫子曰く、彼を知り己を知る、百戰殆からず、彼を知らずして己を知る、一勝一敗、彼を知らず己を知らず、每戰必ず殆しと、此の語は中西君が能く／＼翫味すべきであらう中西君は國家有用の材である、其の代議士たるも、たらざるも人物を輕重するにたらず、而も彼は理論家にあらずして實際家だ、果して然らば自己の本懷を遂ぐるは、代議士となりて抱負を吐き、次で盛んに經綸を行ふ位地を占むるにあり、故に先づ代議士の榮冠を戴くを上分別なりとす、是れ中西君を重からしむる所以である、決して代議士位は何うでも宜しなどの負惜を言ふ場合であるまい。

## 札幌市會議長 松 田 學

需木風多し、寒に其の通りである、風は地平線下に吹かない、地平線上に吹いても、

稚樹には風の威力は左程及ばない、丈が段々延るに伴れ、風當りが強くなるのは、絮説するまでもない、人間も段々社會的に位地が高くなると、嫉風と云ふやつが吹き捲くる、和風もあるが、先づ嫉風が強いのである。

嫉妬家は宿の妻君ばかりでない、ふとした道樂が崇つて、胸倉にかじり付かれる災厄は、拂へば譯もなく除き去られる、焼餅の上旬の果は、何かの寄せ鍋ぐらゐで丸く納まるが、納まらぬは人物についての焼餅だ、例へば梯子の頂上まで登り詰めたも、八合まで登れば、種々難癖をつけて引き下さうとする、引下して焼いて砕いて、粉にして食つて仕舞はなければ、空赦罷かりならぬとある、何等の果報者ぞ、好いた男は星ほどあれど、妾の惚れたは月ばかりと、其のお月さまになつたのは。

松田學君は、喬木である、お月さまである、嶄然として頭角を露はす、豈妬風なきを得んや、又豈和風なきを得んや、非難者もあれば、同情者もあるは、蓋し浮世の状態で、萬已を得ない、松田君の過去を案するに、時に順風に送られて、帆走る得意あり時、妬風に遮られて怒濤狂瀾に落ち、暗礁に坐するの失意あり、其の得意と失意を比

較すると、寧ろ失意の甚だ多きを悲ますんばあらず。

何故に得意少くして失意多きか、是は輕々に裁斷するを許さない、古人も棺を蓋ふて事定まると言つた、松田君は古稀の齡を迎へて、意氣壯者を凌ぐ馬援の概あり、特に年若き配偶を得て、精力一層加はる、七十の老人とは、何處から見ても受取れぬ、多分は助川貞二郎君や、遠藤石太郎君の如く血壓低い作用でもあらう、元氣旺盛なる松田君、今後如何に發展するかも知れぬ、其の人物に向つての遠慮なき評定は、今暫らく保留しやう、願くば過去は過去をして葬らしめよである。

松田君は札幌實業界の長老なる如く、札幌政治界の嗜宿である、その札幌商業會議所會頭たりしことに依り、又其の淺羽靖の後を繼いで、衆議院議員たりしことに依りて彼が政治的實業的手腕才幹聲望の、決して凡ならざるを推知し得べし、彼は實に一頭地を抽いた、而して高く空に聳へた、是彼が實力の致す處、決して空中樓閣と一視すべからず、悲ひ哉彼の性癖は、一朝にして失脚の餘蘄なきに至らしめた、性癖とは何ぞ、餘りに自信力強く、餘りに尊大振ること、即ち是れである。

信じて行へば鬼神避るのだ、此の自信力を飾るに、自尊心……天上天下唯我獨尊主義を以てしては溜まらない、自尊心の強きことに於ては、お釋迦さまと肩を並ぶるにたゝる、併し之が松田君の長所でもあり、短所でもあるのだ、今日までの行徑に徴すると、長所は以て缺點を補ふ能はず、理窟に偏した彼は同情を失して、勢ひ孤立に陥らざるを得ない、彼は正しく孤立に陥つた、孤立……彼は名譽の孤立なりと、獨り自から快として、衆愚を笑ふたかも知れぬが、笑ふものゝ却つて愚なるを悟らぬは残念なりだ。

學殖に於て、識見に於て、彼は確かに衆に秀でて居る、彼の政治眼に映ずる、一柳仲次郎や、北林屹郎や、僥倖にして代議士に有りついた澤田利吉や、參與官の夢を見て喜んだ筈の小池仁郎輩は、小僧ツ子に見ゆるに相違ない、實際は小僧ツ子かも知れない、彼が憲支部の年寄役たるの日、彼等に臨むに小僧ツ子扱ひをした、勿論他に對しても左様であつた、之が抑も彼が失脚の因である、小僧ツ子共は、彼が傲岸不遜の態度を怒らずには居られない、否實際は傲慢でも不遜でもない、腦味噌の足りない彼等

を、指導啓發しやうとするから、如何にも態度が、左様に見へて癢に障つたのだ。

札幌の政客中に、彼はどの學、彼はどの識を有するものは、珍らしからう、故に彼は威張りたがるのだ、衆愚は彼を威張らすのだ、斯く觀すると威張る者の罪にあらずして、威張らす者の罪だ、夫れは彼が學識についてでなく、其他に於て、彼に超越するものあらば、彼は之を尊敬するに吝ならなかつた、例へば山本厚三には人格に於て助川貞二郎には才幹に於て、敬服するのである、要するに松田學君が、威張るやうに見ゆるのは、凡ての點に於て、彼に超越するものがないからである、彼豈に盲目蛇に恐れざるものならんや。

彼は博學である、和漢洋に通ず、諸子百家の書は、お茶の子サイ／＼である、特に英學は堪能中の堪能と謂ふて可なり、聞け、如何に彼が對談中に英語を濫發するかを、曾つて或皮肉屋は「貴公は日本人か西洋人か」日本人と、西洋人とを取り違へては困ると、眞甲から一太刀浴せたことかある、其の皮肉屋は、昔、英語教員を勤めた人間だ學君の濫發する位の單語が判からぬではない、けれども余りの英語交りの談話に中毒

られニガクしく思ふた結果一寸皮肉くつたさうだ、とは云へ松田學君は博學である博學を街ふにあらざることは、記者万々之を保證する。

種々雑多の人間を收容する世界に餘りに神經過敏では世は渡れぬ、我執我見を張り通ふさうとするから間違が起る、如何に利口ものでも、時としては大馬鹿を装ふはねばならぬ大智は大愚に似たりと云ふ言葉を、好く味へば、誤りなきに近かいのだ、自分が餘り利口なばかりに、出世しそくなれた男に、昔の長官河島醇あり、中井櫻洲あり、三浦觀樹將軍あり、此等は先づ近世馬鹿の標本と謂つて可なり、其の能く四角四面に張り通した許かりに、遂ひに大臣の椅子に有りつき得なかつたのだ。

芝居で演ずる「大藏卿」彼は日本一の大馬鹿と唱へられてゐる、之がため驕る平家の眼を暗まし、災難を遁がれたぢやないか、當節柄大智と云ふ奴は、馬鹿を装ふことの上手なのを謂ふのだ、万事万端、我意の如くならしめやうとするから、面倒が持上がる宿の妻君すら、往々亭主の言ふことを承知ないことがある、親權を振り廻はして壓制し得る、子供すらもだ、偶々親に楯突くのだ、其處で調和と云ふ必要が生ずる、調

和とは我意を所張らないことだ、大概の事は、聞かぬ振り、見ない振りするに限る、屁を放つて知らぬ顔で済まし込めぬ奴に、何が出来るもんか、松田學君は宜しく、大馬鹿者の大藏卿に學ぶ處あるべきであらう。

根が馬鹿の人間にして、利口振るのは慮外千万だ、不屈を極だ、松田君にすれば、利口者が馬鹿の言似をするのであるから、世間の識者は、必ずや松田はエライと三歎するであらう、而して幾重にも苦勞を察するであらう、若し彼にして、調和の美質を備へ居たなら、今日の失脚に甘しなくても宜しいのだ、人或は曰く、松田君は市會議長の位地を辱ふす、失脚と見るべからずと、是れ彼の心事を諒察し能はぬ短見だ、彼の實力識見、才能から推して、彼は決して市會議長位に甘ずる人物でない、彼が抱負はより以上大なるべきはづである、彼をして道廳長官たらしむるも、結構に勤まる、大藏省の局長位は何でもあるまい、一旦政治に志して代議士たり、故障なく代議士を繼續し得たならば、政務官位には漕ぎつけられたのだ、政治的閱歴から觀ると、中西君も東君も山本君も、等して彼の後塵を拜せざるを得ないからだ、故に曰く松田君は失意

の人なり自から好んで失脚を招けり、一般の捧ぐる市會議長の名譽は、彼が甚しく恐縮する處なりと。

松田君は死せり、活くべき途ありや、曰く有り、大に有り、民衆に政治的教養を授くるにあり、北海無産黨を組織して、政治的運命を推開するにあり、彼の活くべき道は唯之あるのみ、唯夫れ之あるのみだ。

### 愛嬌溢る病院長 木根淵 清

「愛嬌」は人間處世の必要なる道具だ、人に接して温顔以て愛嬌を振りまく、常にニコニコ顔なるのと、闇魔顔なるのでは、其處に千里の差が生じて来る、併し其の愛嬌も心に蟠りなき天真爛漫の愛嬌でなければならぬ、胸に一物を疊みこんでの愛嬌は、同じ愛嬌でも劍を含んで險呑千万である、斯の如きは畢竟無愛嬌と言ふわけになる、世

には此の種の人物が多い、吾が木根淵清君は、決して私利の爲めに愛嬌を振りまかない、其の無愛嬌の中に眞の愛嬌が存在するのだ。

醫師には世俗に所謂おべんちやらが必要だ、只一に患者の御機嫌を損せざらんことを努むる、心にもないことを詐つて、患者の歡心を買はうとする、之が醫師の外交手段となつてゐる、之がため藪醫竹庵でも、外交上手になると一時は千客万來の盛況を呈するけれども決して永續はしない、如何に佞辯人を釣り得るとしても、手腕が伴はなければ、遂には鍍金が剥け落ちて、門前雀羅を張らざるを得ない、オベンチャラのお醫師さんほど、氣の毒なものはない、吾が木根淵君は、醫師の天職を完ふせんが爲め口頭の輕薄を排し、有りの儘の容体を、有りの儘に直言して憚からぬ、患者の意に逆からうも顧みない、此の勇氣は、普通開業醫の禁物とする處であるが、木根淵君は之を平氣でやつて居る、此處が彼の一般開業醫に傑出する處であると信ずる。

彼は信州の産、家は代々醫を業とし五代を續けた、彼の父は藩の御典醫として令名あり、彼は其の三男に生れた、長兄は工科大学を卒業して志を立て、次兄亦醫業を繼が

うともせず、己れの欲する目的に向つて走つた、三男坊の清君も國家の干城たらんと志し、海軍兵學校に入つたが、五代連綿の醫業を絶やすに忍びずと發心し、志を轉じて金澤醫學校に學んだ、學成りて歸郷し、父の家業を繼承しやうとした、然るに日進の醫學を修め、新知識を有するにも拘はらず、郷黨の彼を視ること青二才の如く、敬して之を遠ざけて矢張り老先生——父——に脈を診して貰はうとする己むなく彼はトラホーム係りたらざるを得なかつた、新知識、新醫術の所有者たる彼も、器量の下がること夥しい、其處で彼は更は醫術の蘊奥を極めんと、花嫁を携へて上京し、研究に没頭した、醫學上の知識も、實驗も一段と進んだ、偶々遊意頻りに起り、遂に北海道觀光となつた、既に觀光と云ふ、當初から北海道で聽診器をヒネクル意志はなかつた、只ホンの見物の積りであつた、早くいふと、新郎新婦相携へて、北海道のホニームーンに過ぎなかつたらしいが、本道が餘程氣に入つたと見へ、札幌を第二の故郷とするに至り、遂に今日の如く、名聲隆々たる「木根淵病院」を苗穂に創設するに至つた病院開設以來、彼の深甚なる知識と、卓越せる醫術は、衆人の認むる所となり、名聲

噴々として、全道を掩ふに至つた、特に紫外線治療機太陽燈を準備するに及び、患者先を争ふて門に集り、新療法を味ふに至り、愈々以て醫門の榮を高ふした。

木根淵君の患者に對する手當は、實に至れり盡せりである、彼の頭腦は四六時中、患者のために安まる時がない、朝は未明に床を脱けて病室を見舞ひ、患者を診し、異状なきを確め安心して床に歸る、此の間、家人も知らず、固より看護婦などの知る筈がない、患者に對して忠實なる、概ね斯の如し。

彼は眞の愛嬌者である、己れを飾らざる愛嬌者である、常に曰く、病氣を秘して、氣安めを云ふ位、醫師としての罪惡はない、肺病は人の最も忌む所であるが、肺病を肺病なりと斷せずに、好い加減の病名を附して、患者を安心させるから、肺病が漸々傳染するのだ、而も出鱈目の病名を附して投藥するは、藥代の泥棒と云つても然るべし自分は凡ての病氣に對して、診察通りに發表するを躊躇しない、決して氣安めを云はぬ、斯くすることが、患者に對する、面を冒かしての愛嬌と信ずると、以て彼が病氣に對して忠實なるを證する。

彼が患者に對する用意は實に周到である、例せば曾つて一患者の治療の如き其れである、肥滿せる人が胃痙攣を起した、病勢甚だ急激であるので其の苦みも一層甚だしかつた、彼は往診して注射を施した、同時に心臓にも強心劑を注射した、其れは肥滿せる躰質なれば、或は心臓に万一の變を起さんことを憂へ、之を豫防したのだ、然るに胃痙攣の注射薬は、薬効が極度に達すると、人事不省に陥るさうだ、木根淵君の注射後、患者は人事不省の状態に陥つた、家人は大に驚いて某博士を招じて診察して貰ふた所が、是は大變な危篤に陥つた、生命危し、正に是れ薬の中毒である、自分一人では心もとなしとて、他醫の立會を求めた、然るに立會醫師が眼球の反應を検する時、患者は自發的に正氣に返り、バッチリ眼を開き、ア、腹が減つたと食事を求めた、三椀の飯を平らげ盡して元氣も恢復した、醫師も驚き、家人も驚いた、其の人事不省に陥つたのは薬の威力に依りてある、決して中毒でなかつた、之が醫師會の問題にならんとした、固より問題となるべき性質のものでないから、其儘に事済んだ、病氣の事は専門家が勝手に議論するが好い、記者の如き門外漢の關する所でないが、患者の

體質に依りて、胃の治療と同時に、心臓を保護する手當は、用意周到間然する所なしと、却つて木根淵君の手當を賞賛されて居る。

彼は隠す看板なき平民主義の人だ、人に接して甲乙なし、凡て一視同仁である、其の體格が肥大であり、妄言妄語しないから、一見尊大ぶるやうに見ふるが、決して尊大ぶるでもなく、決して豪傑ぶるでもなく、凡てが天真爛漫である、彼齡漸やく三十七前途は長い、將來如何に發展するかは、興味ある問題だ、彼の趣味は只一つ、曰く野球だ、思ひ出の昔、長野中學時代の投手として、プレートに立つた頃は、縣下は勿論近縣の野球界を風靡したもんだ。

## 札幌商業會議所會頭 大瀧甚太郎

人物の大小を度る尺度は、智である、只此の智は、人間有合せの智識ぢや駄目だ、全

能全智の神様が、人間に生れ變はらざる以上、先づ求め得がたい、同じ人間が、同じ人間の大小を度るは比較的のもので、北海道では一簾の人物でも中央に押し立ては二そく三文にふまれる悲みがある、人間も時と所によりて、人物ともなり、不人物ともなるのだ。

大人物とは人並勝れた智慧を有するものなりと解すれば宜いだらう、大智は大愚に似たりと言ふが、其れは凡人から觀た處で、大智は矢張り大智で、大愚は何處までも大愚だ、凡人の眼には、大智は大愚のやうに映ずるまでだ。

群童に魁たるは天下に魁たる始めだ、エライ人間は小供の時分から違がつてゐる、天下に魁たるほどの人物は小供の時から餓鬼大將を勤むる、何處にか毛色の異つた所がある、吾が大瀧甚太郎は、神童であつたか否かは知らぬが、兎も角も餓鬼大將の役目は必ず辱かしめなかつたであらう。

甚太郎は、實業家として頭角を現はしてゐる、雷に札幌に於てのみでない、全道に涉つてゝある、其の札幌商業會議所會頭としての聲名は、日本全國に鳴り響いてゐる、

少ふして群童の魁であつた甚太郎は北海實業家の魁となつたのだ、是れ決して溢美の言でない、彼が北海道實業家の代表者たる位地を占むる點に於て、斯く斷ずることは決して他實業家に對して、不遜の言辭でない、札幌は北海の首都である、北海道を代表する位地を占めてゐる、従つて札幌商業會議所會頭たる大瀧甚太郎を全道實業家の代表格なりと斷ずるに何も異論のない所である、然り大瀧甚太郎は北海實業家の代表者であるのだ、人或は曰く、甚太郎は無學者なりと、彼が有學か無學か、固より記者の與かり知りざる所である、人物の評定は必ずしも有學無學が標準にならない。

甚太郎は越後の人、慶應元年生れ、嚴父甚五郎氏は、早くから札幌に居住して、魚商から木材商に轉じ、産を爲した、甚太郎は父の業を承け、専ら木材に力瘤を入れ、業熊順潮に進轉して、今日の巨富を得、實業界に頭角を現すに至つた、木材會社の常務取締、造林會社業務擔當社員となり、各種の市公職を帯び、札幌商業會議所議員から副會頭に推され、次で會頭とり、三期を續け、今現に會頭の椅子に在り。

彼は能く政治に興味を有し、政黨を理解す、彼は半政治半社交團體たる、公友會の牛



耳を握つてゐる、公友會は實業青年會と相對峙して、札幌を折半するの勢力を持つる中西六三郎との關係上公友會員の殆んど凡てを擧げて、政友本黨に加盟したが、公友會は社交團體とし嚴存してゐる、政黨的實體から觀れば、公友會は即ち政友本黨である、故に甚太郎は實際上の札幌政友本黨の首領と解するが順當だ。

政治に趣味を有する甚太郎君は、政治慾は極めて淡泊である、代議士たらしとする慾望は更にない、今日まで幾度となく代議士候補者に推されたに拘はらず、その都度辭退して受けない、而して後賢を推薦したことで證明される、謙讓の美德は常に政治についてのみ露現するでなく、實際にも其の通りである、商業會議所會頭の如きも、後賢に途を開くため、再三再四固辭したが、環境の事情が之を容さぬので已むなく受けてゐる次第で、自己を犠牲に供し、後進の進路を開かしむると云ふ美德は、何人も推服する所。

大正十四年、多額議員の選舉が行はれるに際し、札幌の互選資格者有志は、否がる彼を無理に納得せしめて候補者たらしめた、彼を勸奨する理由を摘めば、曰く、從來函館と小樽とは互に一人を選出してゐる、札幌は殘念にも常に貧乏籤を引いてゐる、本道の首都とも有らう、札幌の体面を汚がすこと夥しい、今回は定員二人の中、一人は是非とも札幌の手に入れねばならぬ、算すれば四十名の有権者あり、一人を所望することは決して空想でない、一致團結すれば、優に一人は拉し得られる……成程には一理がある、彼も實に尤と信じて遂に立候補を決意したのであらう。

彼が愈々選舉運動を起すや、記者は萬一の變を虞かつて左の忠告を試みた。

長者議員の候補、大瀧甚太郎君は聰明の人である、其の明遠く、千里の先を察し得ると信ずる、君が環境の事情を精探して立候補を宣す、胸に成竹あつての上に乗違ない、何事にも用心堅固の等なる君は、固より輕舉妄動を戒め、切めから確信なくして、迂濶に事を擧げまい、況んや今回の擧は、天下分目の戰爭である、實際君の生涯に取りて、浮沈の岐かるゝ處であると信ずる、是に於て君及び君の推薦者は、緊く禪を締め直してかゝらねばならぬ。

事を爲すには人心の和合統一が最も必要である、戦に直面して怖るべきは強敵でな

い、味方の和合一致である、抑も和合一致は、小異を棄て、大同に合する心理に出發する、勝つことを窮極の目的としたならば、紛々たる細故を拂掃するは譯のない話だ。

戒むべきは「胴上げの手放」である、ワツシヨくの掛聲勇ましく擔ぎ上げられて、ドシンと手放を喰ふことである、利する處は腰部の惱みのみ、手足の痛みのみ、是れ猶可なり生命には別條なし、若し頭部の打處でも悪いと、忽ち脳震盪を起して生命に別條がある、事竝に至れば、胴上げを手傳つた、ワツシヨイ連の不徳義は勿論の事ながら、手放しの不覺を喰つた本人の愚を笑はざるを得ない、要するに「胴上げの手放」は不一致不和合から起る、必然の結果である、避くべからざる危険極まる藝當である。

人心の異なる其の面の如しと戒めてある、我輩は其の面は異なるも、其心は同じかれがしと望みたい、特に大瀧君の長議選舉に就て痛切に其の必要を感ずるのだ、人心和せず、勝つべき戦争も、屹度負けることは受合だ、夫れ和合するも、せざるも、

統一するも、せざるも只一選舉總督の采配に係る、選舉總督其の人を得ると、得ざるとに依り、大瀧君の勝敗が決せられる。

夫れ戦は慢ずるより危きはなし、故に得意の位歩を占むる者でも、死地に陥り居る覺悟を要する、有体に言ふと、大瀧君の位地は決して安全なりと謂ふ能はず、金子君の外他に一人の有力なる候補者を出すに於て、危険は一層甚だしきを加へ來る、安心どころの騒であるまい、況んや、由來公友會の戰士は戦に拙なり、策士亦策に遺算あるに於てをや、餘程確かなりしなれば、泣面を蜂にさゝれないとも限らぬ何は兎も角も用心が肝腎だ、我が輩は大瀧君の胴上げの手放しを恐るゝの情切なり故に一言を費すこと爾り。

初め大瀧の軍を起すや、必勝を期した、其後高橋軍起り、次いで小熊軍起り、競争は混戦状態に陥つた、之が爲め痛手を負ふものは、獨り大瀧のみならず、金子も亦然り二者均しく打撃を受くるも其の創痕の深淺厚薄を比較すれば、金子は輕傷にて、大瀧は重傷と見られる、其の下手人は取りも直さず、高橋直治である、小熊氏に至つては

損害を興ふる程度、殆んど言ふにたらず、果せる哉、互選の結果、大瀧甚太郎君は脆くも惨敗を招いた、是れ抑も何の故ぞ、彼の天の時を得た、地の利を得た、而も遂に人和を得なかつた、實際記者が注告したる「胸上げの手放し」を喰つたのである、彼は能く／＼人心の頼むるたらざるを悟つたであらう、然るに彼は敗戦を自己の不徳に歸して怨まず、寔に大人の風ありと謂つ可し。

戦に負けても彼の人物は立派である、彼は正しく將に將たる資質を具へてゐる、何處までも總大將格である、現在政友本黨支部中彼の上を越すほどの人物は、先づ見出すに苦しむ、勿論、學識に於て、手腕に於て、材幹に於て、彼に秀づるものに乏しからず、然れども群雄を駕御する術に於ては、何人も彼に一步を譲らざるを得まい、慾を言へば、彼を商業會議所會頭の椅子に押込め置くは寔に惜むべきである。

## 本道木材界の重鎮 大嶋喜一郎

我國で鐵道建設請負業者の牛耳を握るものは、河合徳三郎である、彼の名は大和民勞會を提げて一方國粹會と對抗して、威武を示したことに依りて喧しかつた、私財を抛つて高輪泉岳寺に大石瓦雄の銅像を建て、忠勇義烈を表彰し、又勞働社會大學を創立して、勞働者指導の士官を養成し、特に又東京府下日暮里に地を相し、宏大なる施療病院を建設して、窮民の病を救ふ、此等のため費やす處三十万金を下らずと稱せらる、寔に奇特の人物であるが、元を質せば一介の勞働者に過ぎなかつた、北海道鐵道建設請負業組合長として頗る羽振りの好き栗原源藏と雖も、彼の下風に立たざるを得ない。

吾が大嶋喜一郎は、河合と性情行徑を同ふするが如し、河合がモッコ擔ぎの勞働者に身を起したるやうに、大嶋君も矢張りモッコ擔ぎで苦んだ、彼は文久三年、百万石の繩張り加賀の國金石町に産れた、何しろ加賀は大藩である、領域は加越能三國に跨つ

てるだけ、其れだけ氣風が雄大である、今でこそ時たま「加賀ッポー」の貶辭を耳にするが、昔は加賀の加の字さへ口すさみすれば、口が曲がると言はれた位に尊いものであつたさうだ、概して加賀人は氣分が大きい、決して小事にこせつかない、喜一郎長じて霸氣滿々雄圖を抱いて渡道したのは恰も氣血盛りの二十一歳、明治十六年の五月であつた、固より確たる計畫を建て、渡道したのでない、末は野となれ山となれ主義で風來したのであらう。

記者が雄圖を懷いてとお世辭を並べるのは、即ち北海の遺利を拾ふと云ふことを意味する、彼は全く遺利を拾はんがために來たのだ、北海の地、如何に遺利多しとは云へ濡手に粟の掴み取りと云ふ譯に行かない、之を能くするには相當の資金を要する、資本固より缺乏、有するものは股間の金二兩のみ、是れとて天野屋儀兵衛は男でムると啖呵を切る折の外通用しない、己むなく身を落して土工夫となつたが、加賀翠丸の働振りを見せて、仲間を驚かし、又親方を嘆せしめた。

天は自から助くる者を助くることに相場は極まつてゐる、天は喜一郎の精勵努力に感心して、何處までもモツコ擔ぎたらしむるに忍びずと思ひ、運命推開の途を教へた、遂に彼は土木請負人山崎忠太郎に拾はれ、帳場の小走り役となり、段々出世して支配人格となつた、足掛五ヶ年間に土木請負業に關する一切の智識と呼吸とを覺へ悟つた今は一本立になり得るまでに、凡てを悟り得たので、茲に獨立して土木請負と木材業を兼營するに至つた。

土木建築請負業者に要する資格は多々ある、併し多くの人を使役することに於て、其の能く心服せしむることが第一義でなからねばならぬ、之には大なる度胸を要する、シミツたれざるを要する、己を空ふして徳を施すを忘れざるを要する、此の三拍子が揃へば、能率は増進して、仕事は順調に運ぶのだ、世間往々失敗者を觀るは、歸する處は、三拍子の揃はぬ罪だ、己のみ満して、部下を空ふする、則ち經濟學上の剩餘價値を着服する者にして、遂に失敗を招かざるは、不思議な位だ。

百万石の大藩に生れた喜一郎、度胸の大小を證議するが野暮である、相模太郎の膽甕の如しと言ふ言葉は、取つて以て喜一郎に擬すべきである、部下を思ひやりの深さこ

と、涙脆ろきことはれ彼の天資と謂つて可い、何れの場合に於ても、義を見て爲ざるは勇なきなりの氣分が横溢してゐる、是に於て、多數の部下の心を集中することが出来て、手足の如く使ひ分けられるのだ、喜一郎が請負業に成功したるは、之が爲めである、特に木材業の収益は即ち今日の巨富を致した原だ。

世に成金なるものがある、彼等は福の神の俄かの御入來に、膽を潰ぶして驚喜し、恰も乞兒が米の飯に有ついたと同様の態度を持する、其の態度甚だ憎しからずや、吾が喜一郎の致富は、精勤努力の報酬である、固より成金風の手傳も尠からぬであらう、が併し彼の富は健實の基礎に湧出でたので、風來の富でない、基礎をたどつて自然に積まれたのだ、苟も成金風の惠澤に浴しなくも、今日ある運命を具へて居るのだ、故に喜一郎を成金の列に伍せしむるは酷である、財成りて彼の男振りも大いに揚がつた彼は彼の財力を提げて、社會奉仕を企て、忠愛の精神を發揮するに至つたのは、披露する迄もない。

元來金満家は貧乏者に比して、幾倍の苦勞がある、飽くことを知らざる、是が第一の苦勞である、財産の減耗を恐る、是が第二の苦勞である、他の惡しみを受けて生命を縮めんことを恐る、是が第三の苦勞である、貧乏人は食ふことにのみ苦勞する、其の焦心苦慮を比較すると、到底お話しにならぬほどの隔りがある、其の四六時中、過慮する結果が、神経を過敏ならしめ寸時たりとも安ずるを得ない、是れ多く取つて、能く散することの、身命を安ずる所以の理を知らざるからだ、知つて之を行はざるが爲である。

世間多くの富豪は、身命を縮めてゐる、寔に愚の骨頂である、生命よりも金が大切なりと心得へる拜金者流は、宜しく兇刃に斃れた安田善次郎を手本とするが宜い、吾が喜一郎は、金満家としての苦勞毫もあるなし、是れ能く取り、能く散するの理法を善解するからだ、看よ、彼は厘毛を私しするを欲しない、而して有効に散するに吝ならず、金力に誇らんとする驕傲の態度は、如何にしても見出し能はぬ、愈々積んで、愈々謙抑なるは、宛かも稻穂が黄熟に伴れ、段々と頭を下ぐると同一である。

彼は熱心なる敬神家である、數千金を抛つて、札幌神社に納額堂を献納したることに

依りて、一班が推せられる、又彼が如何に責任觀念が強きかは、彼を中心に推薦した大瀧候補の選舉費は、時機に依りては獨自一己の手に負擔しても、大瀧の必勝を期せねばならぬと云つたことで判かる、斯く立派な心情の人なるが故に、札幌市に取りては、最も必要な人材で、初期の區會議員に推され、次で衛生組合長となり、區常設委員となり、札幌水電取締役となり、札幌商業會議所常議員となり、尙武會幹事となりて、公共の事業に盡し、又公共慈善事業に對する出資尠からず、實に金満家の模範とするに足りる。

## 拓銀の剃刀取締役 安藤信彦

何事も六ヶ敷考へれば六ヶ敷くなり、容易く考ふれば造作もないのだ、事の難易、其れは考へやうに依つて露はれる現象だ、金融機關の銀行業は、其の實は難に似て難に

あらず、易に似て易にあらず、此處の道理を克く分別する人物ならば、何人も銀行業者たるに難からぬ。

銀行商買を一口に言ふと、金の出入する處だ、二口に言つても、金を借りたり貸したりする處だ、其の營業は極めて簡單である、不動貯金銀行に例を取ると、僅か二百万圓の資本で、民衆から約一億九千万圓と借金して居る、殆んど資本金百倍の借金だ、其の借金が資本となつて運用されて居る、故に若し資金の運用に手抜かりがあると、資金は回収されず、回収しても損が立つ、銀行の信用は段々薄らぎ、遂にはゼロとなり、預金の取付けを喰つて青くなる、ドトの詰りが銀行の身代限りと來る、經濟界を攪亂する虞れがあるのだ、故に曰く、銀行は簡単な商賣に似て、其の實は極めて複雑して居る、易に似て、其の實は至難であると、畢竟難易、複雑、簡單と云ふことは、當事者の能不能に依り、誠不誠に依りけりである。

記者は今に於て北海道拓殖銀行の效能を並ぶる程の閑を有しない、官民共營の拓殖銀行は、特種の性質を有し、本道及樺太の拓殖資金を供給するが主だ、拓殖事業の進展

に伴ひ銀行の資金も従つて増加された、三百万から五百万、次で一千万圓と云ふ程度で行く、同行の資本は、五千万圓位なくちや、思ふやうな商賣は出来兼ねると認めらる、兎角に拓殖銀行は、重大の使命を有する、其の資金運用については、慎重の考慮を拂ふは勿論であるが、歴代の頭取中には、貸出しが放漫に流れ物議を惹起したことも聞及ぶ、詰り用意に慎重を缺いた結果だ、現加藤頭取は、有名なる財政經濟通である、人格に就て一點半角の批難を見出し能はぬ、職務を執る嚴正、決して公私の別を混淆しない、想ふに加藤頭取は前代の失策を償はんがため、而して行内の墮氣を刷新し、拓銀本來の使命を完ふせんがため、頭取の重責に當りしならん、先づ拓銀の幹部を更新したることに依り、其の用意と決意とが窺はれる。

安藤信彦君は、加藤拓銀内閣の重位を占むる一人だ、彼が如何なる人物にして、又如何なる手腕を有するかは、記者が千万言を繰述する迄もなく、加藤頭取に擢でられて取締役たる一事で分明だ、彼は明治三十九年帝大英法專攻の法學士である、帝國商業銀行支配人より轉じて、拓銀に入り、樺太支店長として、敏腕を縦横に振ひ、樺太開

拓に貢献するもの淺からず、今回入りて拓銀内閣に列するに至つた、資性英邁豁達、藤田東湖の遺風に私淑するだけあり、茨城縣人の美たる特性を發揮するもの、恐らく本道に於ては、其の隨一に推さざるを得ない、記者は信彦君の多幸多慶を祝福して己まない。

## 商と農に成功したる 計良翁助

「佐渡は四十九里波の上」其の浪上に高く屹立したる佐渡が島は、因由深き靈地である日本一の産金地であると同時に、古昔は罪人の流配所であつた、土一升に値するとうたはれたるは、昔しの大江戸八百八町の眞只中の日本橋の一隅であつた、佐渡の土は其れ以上の價值がある、宛も金山が土を被ぶつて、三越の沖合に湧出でたりと觀るべきである。

眼界を大きくして観ずれば、渺茫たる日本海は一個の泉池である、泉水の中に聳ふる金の築山に過ぎない、越後人士が、自家庭園の築山を誇るは、誇るだけの理由もあり、価値もある、曾て戦國の世、上杉謙信が越後に根據を築き、北陸に覇を唱へしは、佐渡の金庫を掌中に收め居たからである、戦争に軍資金は附物だ、腹が減つては戦の出來ざる如く、軍用金に缺けては、徹底的の戦争は繼續し能はぬ、如何に糧に敵に頼るを本能と心得る世でも、軍用金の充實位心強いことはない、謙信が群雄に冠たる所以實は兵站部の充實にあつたと信ずる。

由來佐渡人は金に飽いて居る、金の價值を解し得ないほどに金に飽いて居る、先以て富裕の人である、其の餘りに富裕なる處から、風俗の淫逸に流れるは必至の弊害である、聞け俗謠に聞け「佐渡の相川鳥賊釣船は、鳥賊は釣らずに、嬖盜まれた」と云つたやうな言句を記憶する、傑僧日蓮弘法以來、住民の心靈に多少の變化を來たしたるも風俗の淫猥なる點は、肥後の天草島と相似たり、而も住民の質朴なる氣質は、他に誇るに足ると信ずる。

翁助は金の唸なる佐渡が島根に産れた、金の精氣を吸ふて生れたと見へ、貨殖の途は生れながらにして會得したりと謂ふも可なり、生家は家系連綿として數百年に渉るの舊家なり、家代々農と漁とを兼ね營む、長じて育英に志した、是れ孟子の心事を學んだのである、孟子は天下の三樂を説いた、其の一は即ち天下の英才を教育する事だ、是に於て彼は新瀉縣師範學校に學んだ、蓋し育英事業は頗る難事に屬す、此の難事業が果して翁助の適性なるや否やを究むるに及び、自己の性格を知れる彼は、育英事業の不適任なるを發見し翻然大悟して、商估として、天性を完ふすべく決意したのであつた。

教員志願から商人への一足飛びの早替り、隨分飛び放れた變化だ、併し此の變化は、彼に取りては進歩である、趣味深き進歩である、無趣味を出で、趣味の境涯に入つたのだ、愈商人たるを決した彼は、商業の地を擇ぶに苦んだ、詮議に詮議を重ねた結果が北海道である、明治二十三年三月、彼は小樽に渡り米穀荒物店を開いた、けれども小樽は彼に取つて地の利を得ない、轉じて札幌豊平町に移り商業に従ふた。



米穀商は彼の終生を托すべからざるを悟り、札幌に移ると同時に、商賈替へして古着屋となつた、之が彼の適性の事業と見へ、日増に繁昌したのである、想ふに今日計良家を建設した基礎は、古着屋であるのだ、古着屋として勢力を張りし彼は、三十三年に至り廢業して質屋となつた、是れ庶民の忠實なる金融機關たらんがためだ、多くのプロ連の便宜を計るための質屋は、宜しく平民銀行の名を附すべきである。

平民銀行頭取としての計良翁助、其の寡慾にして博愛主義の經營は、更に一層の名聲を馳するに至つた、既にして古物商組合を組織して、之が組合長に推され、次で北海道古物商聯合會成るに及び、又推されて組合長となり、全道組合に號令するの位地を占た、衆皆彼の節度に推服したるは、高潔にして公正なる人格の然らしむる所である、公人としては札幌區會議員、札幌商業會議所議員、衛生組合長、札幌區計畫調査員、土木常設委員の職責を完し、聲望衆を壓す、彼は一而拓殖に志し、北見鬼志別に五百町歩、中頓別に百四十町歩の農場を經營す、今や家業を嗣子覺氏に譲り、農場經營に餘生を送りつゝあり、記者が冠するに農業家を以てしたるもの、之がためなり、嗣子

覺君は北海中學出の秀才にして少壯實業家の錚々たるもの、將來の大成期して待つべきである。

## 旭川市助役 稻見貞藏

稻見貞藏君は全會一致を以て推薦された、旭川市の助役である、さて劈頭是非斷はつて置かねばならぬことは、彼が政黨政派に沒交渉であることである、斯う言へば彼は黨派を理解しないやうに聞ふるが、決してさうでない、政黨は能く理解して居るが、自分は政黨に仲間入りをしない、然らば臨機應變の浮萍主義であるかと言へば、中々以て左様に薄志弱行の徒でない、常に毅然たる意志を有して居る、彼が圓轉滑脱の才を備へ容易に人をそらさぬが故、世間では往々瓢箪鯨のやうな人物と誤るが、夫れは間違である、彼が餘りに如才な過ぎるから左様に思ふのだ、何事についてでもだが

此處千番に一番の兼ね合と云ふ大切な所になると、平生猫のやうな彼も、忽ち獅子王の猛威を示すのは、從來の行爲が保證して居る、彼は政黨に對して一視同仁である、故に政黨を利用せぬ代りに、又政黨に利用される憂ひがない、此点は自治制に好適の助役を得たりとして誇つても宜しい。

稻見君は青年にして法學院——今の中央大學に學び、業成つて内務省の腰辨となつた之が立身の門出である、上官も彼の吏才を認め、事務にも熟達したので、拔擢せられて新潟縣の勸業課長に任せられた、時は明治四十一年、當時の知事は故清棲家教伯で内務部長が林市藏であつた、此の林は却々の手腕家で、沃野千里の新潟縣を一人で切り盛して居た、敏腕家の林内務部長は、稻見を勸業課長に得て、新潟縣の産業が更に振興した、林は稻見の手腕を認め、大に信賴して自由に敏腕を揮はしめたものだ、縣の勸業政策に就ては、稻見は言はば林内務部長の參謀格であつた。

當時新潟縣には、産業獎勵のためいろ／＼の會があつた、新潟斯民會——是は人心を新にし民風の作興を圖る目的で、東京報徳會と連絡して組織されたものや、地主協會——是は明治二十五年時の縣知事籠手田安定氏が、地方農事改良を目的として創立したもので——や、大日本産業組合中央會新潟支會——是は産業の振興を計る目的——やの事業を完成し發達せしめて、今日新潟縣の産業の振興を見たので、稻見が勸業政策に對して一雙眼を有する事は事實が證明して居る。

稻見は二宮報徳宗の熱心なる信者である、報徳宗とは二宮尊徳の「勤儉力行」を信條とするもので、彼が同宗の信者となつたのは、即ち「近世文明の精華は道德經濟の圓滿なる發達にあり、國家の富強を期し、民族の發展を圖るは國家個々の經濟道德の調和的進歩に由らなくてはならない、而して其の目的を達する途は民心の作興と民力の充實とを措いて他にない」と云ふ信念からである、爾來彼が報徳宗の信仰は終始一貫して渝はらない、彼が轉じて空知支廳長となつても、其方針は凡て報徳宗から割出して居たのである。

彼が空知支廳長として赴任するや、支廳の建物は恰も報徳寺で稻見支廳長は和尚の觀があつた、部下の町村長を集めては盛に報徳宗の傳道を試みた、稻見和尚の熱誠と勉

強とは實に恐れ入るほどで、「報徳」と云ふ丸薬を調製して町村長の持薬たらしめんと試みたので大体が推測せられる、蓋し當時の町村長は、新十津川に今は代議士の松見喜代太あり、瀧川には今井勇吉あり、秩父別に塙浩氣あり、角田に石原市助あり、岩見澤に小田切亮次あり、孰れも一騎當千の豪傑揃ひで、此等の諸豪は意氣既に稻見を呑み、ナニ稻見の小僧ツ子が生意氣千萬な……と言つたやうな調子で、招集されて會議には一向顔出しもせず、宿屋で酒に浸つて萬丈の氣焰を吐かなければ、料理屋で破天荒の底抜け騒ぎを演じて天井の鼠公を驚かして居たので、成程報徳丸服用の急務が首肯される。

稻見が空知に赴任して痛切に感じたのは、全管内に亘つて勤勞の觀念が缺けてゐる事であつた、何うかして勤勞の精神を吹き込みたいものだと言つた、之は神經の鋭敏な青年から始むるが早道で、効果も多いといふので、青年會の組織を奨励した、奨励の方法が宜しきを得たので到る所の町村に青年會が勃興した、其所で之れに勤勞といふ靈魂を入れねばならぬと、米國大統領リンコルンが自分の靴を自分で磨

いた例を引いて大いに鼓吹したもんだ、これが萬事に應用されて來た、青年の氣風は驚くばかり改善されたのである。

赴任當時の空知支廳は亂雜極まつて居た、稻見は支廳と云ふ家の改善に取掛つた、道廳教育課から那須正夫を抽いて第一二課長を兼務せしめ、町村主任の高井幸次郎を第三課長に据へ、町村主任の石井龍三郎の如き、教育主任の八重柏正の如き、會計主任の上野勇の如き、拓殖主任の小川徳吉の如き、何れも錚々たる人物で、能く適材を選んで適所に配した、斯の如くして空知支廳の陣容を整へ、従つて綱紀も大いに振肅されて、遂に其筋から模範支廳の名譽を擔はしめられたのである、支廳の改革には随分或方面の反感を買つたやうであつたが、其んなことには一切頓着もせず、閉口もしなかつた、要するに容貌は婦女子のやうでも心は毅然たる大丈夫である。

稻見は人を觀るの眼識を備へて居る、一たび心眼を開けば直に心腔を透視し、人の善惡賢愚、能否を判ず、故に用ひて誤ることがない、石井は上川支廳の理事官、那須は膽振支廳長、高井は浦河支廳長、八重柏は空知支廳、上野は膽振支廳の理事官に出世

した、獨り小川は退官したので、支廳長や理事官の仲間入りが出来ないのは已むを得ない、斯く爛眼な稻見が旭川副市長の椅子に据はるに當り、旭川市役所に大地震、中地震、小地震かは知らねども、多少の震動が起りはすまいかと危まれたのも當然な氣がする、併しそれは早速ちやあるまい、幾多の時日を要するは勿論の事と思ふ。

曾て空知は農業の中心であると同時に政治の中心であつた、當時の行政區劃から言へば、上川管内は空知の繩張に屬したさうだ、人口も多く土地も廣く開けて居たので、政治を商賣とする人士の多いのは當然である、燕趙悲歌の士を以て任ずる豪傑に上野勸助あり、田中清輔あり、吉植庄一郎あり、土居勝郎あり、東武あり、黒石長平あり、助川貞二郎あり、松實喜代太あり、吉田卓あり、山田勢太郎あり、岡村三治あり、櫻井良三あり、伊藤廣幾あり、常に本道の政界に風雲を巻き起して居た、彼等の多くは農業を營んで居た、空知原野拓殖功勞者を擧ぐれば、先づ指を彼等に屈せざるを得ないと思ふ。

歴代の空知支廳長は恐らく諸豪の腕まくりに辟易せぬものはなかつたらしい、單り稻見の圓轉滑脱の奇才は能く諸豪の奇襲を撃退し、之を團子の如く丸め了した、其所に稻見式の侮るべからざる手腕が認められる、若し稻見にして柔克く剛を制するの戦術を用ひなかつたならば、彼は疾づくに空知支廳長の椅子から蹴飛ばされたであらう。空知は開拓の實擧がり、今後は土地の整理を要する時代となつた、稻見は赴任早々管内を巡視して其の然るを認めた、是に於て地主會を起して農事の改良を圖り、小作人を表彰して農事に精勵熟達を促し、一に農事の進展に努力した、特に稻見の勸業眼に映じたるは、水田開發の急務なることであつた、管内の到る所が水田造成に適してゐると認められたので、地主に向つて盛に水田を獎勵した、特に稻見の功績を特筆すべきは數千町歩の美田を得べき深川土功組合の竣成である、今や深川方面の農民は之あるがため莫大の利益を享けつつあり、全日本に取りては米穀供給の不足が幾分補はれつつあり、稻見君先見の明ありと謂ふべきである。

若夫れ旭川市助役として揮ふ手腕に至つては、空知支廳以上に訝ゆるを疑ふ餘地がなからう。

## 土木官吏の一異彩 杉森文彦

古來千葉縣は名所名物に富んで居る、九十九里が濱をズツト傳ふて、名代の犬吠崎を曲がつて、利根川の河口に出ると銚子港だ、沖合は海の王様と呼ばれる大小の鯨が群を爲し、各捕鯨者の唯一のお得意先だ、銚子は醤油の本場で、攝州灘の「一本生」と相對して、共に天下の珍だ、野田の「龜甲萬」と云へば、先づ本邦醤油界の横綱たる位地を占めて居る、之が名物の一だ。

成田は名所である、幽邃にて森嚴、味噌摺鉢を覆せて眺がむれば、味噌駿河の三國一の富士山だが、「成田」は恰も摺鉢の底のやうに窪んだ地だ、其の山上に「不動尊」を安置してある、お利益なかくに夥だしいので、善男善女の信仰の的となり、賽銭の如きも往々百圓札が混じてる有様、如何にお利益の多いかが判かる「成田不動」先づ名所の隨一に押すべし。

「佐倉義民傳」で、存外男振りを上げた佐倉宗五郎も出て居る、關八州を風靡した俠客

笹川の繁藏も出て居る、此等は千葉の名物男として日本國中何所に押出しても恥かしからぬ人物だ、弱を援けて強を挫く俠氣は、千葉縣人の特有財産と見るべしである。政友會と日本法曹界とを兼ねて、長老鶴澤聰明博士も千葉縣が産んだ、近代の偉人である、名物である、古來千葉縣の有する名聲は、鶴澤博士を加へて、益々榮光を放つに至つた譯だ、此の偉人の跡を追ふて生れたのが、即ち現時の北海道廳技師札幌土木事務所長杉森文彦君である、彼は大正四年帝大出の工學士だ、土木に關する智識と材幹と手腕、特に土木行政に關する才略は、多く比類を見ざる所である、彼が如何に將來に囑望され居るかは記者の千万言を費やす迄もなく、今回多數の僚輩を凌ぎ、歐米各國に官費旅行の恩命に接したので立證されると信ずる。

道廳は役人に取つての登龍門だ、名譽の役所である、府縣知事や卵子の孵化場と謂はれる、部長から知事、事務官から府縣の部長となるものが比較的が多い、同じ千葉縣人に就て觀た所で、最近泉對教育課長は徳島縣警察部長に榮轉して居る、土屋土地整理課長は廣島縣事務官に榮轉して、此所から歐米視察の光榮に浴した秀才だ、想ふに

今回歐米派遣を命ぜられた杉森技師は、假令經濟上の損失……官費は八千圓だが五千圓は自腹を切るを免かれずとするも、其の見聞を廣め智識を磨き、國家有用の材器を涵養し、將來の大成を期する資本たるに於て、一時の苦痛は何でもあるまい。杉森の土木に關する施設經營は、旭川室蘭の土木事務所長として、公私共に認むる所である其の請負業者と直接の交渉を要する所から、清廉にして潔白、一點半角の私心を挾むなく、加ふるに剛毅果決の人物に非ずんば、其の職責を完ふし能はぬ、往々請負業者との間に醜聲の放たれるは、私心を挾み誘惑を排する勇氣なきためだ、杉森の事務長たる、先づ屬僚の綱紀を匡し、請負業者に蟠れる弊習を掃蕩し、彼等をして乗ずるの機會なからしむ、故に彼の足跡の印する處、盛鹽を以て清められ、恰も暗雲を排して天地快明赫々たる陽光を浴びて、妖怪影を没するの概ありだ。

氣骨稜々たる杉森のため、請負者の宿弊は一掃されつゝあり、屬僚亦彼の士風に感化されて、事を苟もせざるに至つた、斯くて内外の氣風は一新され、忌むべき弊習を絶つに至るのである、是れ吾が杉森の功勳と觀るべし。

威あつて猛からず、以て親むべし、以て狎るべからず、寛嚴其の宜しきを失はざる處に杉森の眞骨頂をみる。

## 北海タイムス編輯局長 山口 政 民

新聞紙は輿論の製造所である、輿論に製造される新聞紙は、權威ある新聞紙とは謂はれない、天下の憂に先だちて憂ふるだけの、識見と抱負とを有せずばなるまい、常に世の尻馬に乗つて走るのには、眞の新聞ではない、世を尻馬に乗せて走るのが、威力ある新聞の新聞たる所以であらう、所謂大新聞と稱するものは、即ち時流に超越する眼識を有するを謂ふと、記者は左様に信ずるのだ。

こと更に引合に出すまでもないが、世界に於て權威ある新聞を擧ぐると、倫敦タイムスがある、英國の政府は、彼の筆加減に依りて、左右される程の大勢力を有してゐる

佛のルマタンでも、米のニューヨークヘラルドでも、一國の政治を左右するだけの勢力を有してゐる、僅か二寸足らずのペン先の威力は、十四吋の砲弾よりも、三軍の兵力よりも偉大である、我國の政界から、藩閥や官僚の勢力を撃退したのは、是れ即ちペンと舌の力なりと斷じ得る、手取り早く云ふと、筆の先で書き殺されたのだ、新聞の威力について最近の一例を擧ぐると、寺内内閣は「國民新聞」の力に依りて、撃退されたのだ、更に進んで云ふと、徳富蘇峯の筆に書き殺されたのである。

斯く觀じ來ると、新聞の力は、實に偉大なりである、偉大なる新聞を書く、記者の勢力も亦偉大なりである、是に於て威力ある新聞は、卓見ある記者あるがためなりと謂ふ結論に歸着する、魏文帝は云つた、文章は經國の大業、不朽の盛事なり、年壽は時ありて盡き、榮樂は其身に止まる、二つの者は必至の常期なり、未だ文章の無窮なるに若かずと、實に然り、經國の大業を心得て書く記者でなければ、權威ある新聞は作れない。

本道での權威ある新聞紙を索めたならば、何人も北海タイムスと小樽新聞を擧ぐることに異存はあるまい、實に彼等は本道の二大新聞である、二大新聞の權威と信用とを兼有してゐる、兩者各々特色特長特質あり、其の勢力亦伯仲の間にあり、記者は此の二大新聞について、遠慮なき批評を試みたいとは思つてゐるが、今は其の場合でない新聞記者としての山口政民君を批評するに當り、特に筆先きを外らして、兩新聞の價値勢力などの比較評論は、餘計な餘興に過ぎずと信ずるからだ、記者は單刀直入、新聞記者としての山口政民君を料理しなければならぬ。

政民君は權威ある大新聞北海タイムスの編輯長として、編輯一切を切り盛してゐる、勿論タイムスほどの紙幅の大きい新聞になると、編輯事務も一人では手が廻はり兼ねる、だから大別して硬派軟派と云ふやうに分擔されてゐる、併しながら編輯統一の全責任は、編輯長たる山口政民君が負はぬ譯けには行くまい、實際云ふと、編輯長は一の技術である、各種の記事を按排して、體裁よき新聞を作ることが本來の任務であらう、故に編輯長なるものは、必ずしも能文の士を要しない、書かざる新聞記者で澤山である。其の能文の士であつたならば、尙更結構であることは申すまでもない。

時間に限りある繁劇な新聞紙を製作するに、書たり作つたりすることは、事實に於て無理だ、無理して書いた處でドーセ碌な文章は出来ないに極まつて居る、元來新聞記事は巧遅よりも拙速を貴ぶことになつてゐる、是に於て粗製濫造の免かれざることになる、彼の唐の詩人賈島のやうに「僧推月下門」の句を得て「推」を敲とした方が善いか悪いとか、此推敲の二字について、徒らに首をひねり過ぎるときは、時間を争ふ新聞は名句が出来上がるまで待つてゐない、故に新聞記事の多くは、口から出まかせのなぐり書である、少し位字句が間違つた處で、其れは大目に看逃がすべきであらふ。地方新聞の殆んど多くは、編輯長は即ち主筆の役目を帯びてゐる、之れでは満足の論文などが書げる道理がない、餘計なおせつかいであるが、北海タイムスをして、更に一層威力あらしめんには、主筆と編輯長の職務をチャンポンニせざることである、冷酷に評すると、編輯長なるものは、編輯局の小間使に過ぎぬ、此の職務は、敢て事實上の主筆格たる政民君を煩はすにも及ぶまい、氏の補佐役たる長内清君が居るから、彼に帳場を任かせて、自分は一日に一段半か二段程の論文を書くやうにすれば、頭に

餘裕も生じ、うるさくなくて結構ではあるまいか、と愚考仕る。

「政民」は雅號である、真本名は「喜一」と申す、喜一幼にして神童の褒れあり、世に異數の成功を遂げし者の幼童時代を過賞して、直に神童とか何とか持てはやすが、多くは後人の附會の過賞である、當てになつて當にならない、だが喜一君が幼時に於て、何處か群童に擢んでた器才ありしは事實のやうだ、夫れは現に札幌電鐵會社の庶務課長を勤むる金子正明君からさく所に考へても、非凡の兒童たりしことが證せられる。小學校を出て、漢英を學んだ、其のお師匠さまが金子正明君であつたやうだ、稍長じて京都同志社に遊ぶもの三年、専ら英語を研究す、其れから東京に出て、法律と政治學を修めた、政治學は多分博士松本君平が經營してゐた政治學校に於てだらうと思ふ松本君平は多年米國に遊學し、米國仕立の新智識の所有者で、夙に我國民の政治思想の低級なるを慨し、之が涵養について、殊の外に智慧を絞つたもんだ、其れには教師が必要だ、良き教師を養成して、之が普及を計る、其の方法は新聞の力を借るが徑捷だと云ふので政治學校を作つた、實は新聞記者養成學校であつたのだ、想ふに政民君



が新聞記者たるの洗禮を受けたのは、即ち此の政治學校であらう、而して授けた牧師は、斯く云ふ博士松本君平だ。

博士松本君平は、今は静岡縣選出の代議士で、少々蠻カラの氣分も見ふるが、其の當時は望月小太郎、山本悌次郎、小手川豊次郎、近藤賤男等と共に、ハイカラ五人組と呼ばれたもんだ、今日は世が段々進歩して、當時のハイカラが、バンカラに退歩したとも、見やうに依つては見られぬでない、政民君は此の五人組の一人松本博士の仕込みであるとするれば、無論思想も筆も共に、ハイカラたるを否む能ふまい、實に政民君は、新聞記者としては鬼才たるを失はぬ、識者が彼を稱して、本道新聞記者中の模範的人格者なりと推量するも、確かに一理ある。

然らば政民君は如何程の文筆を有するかにつき、批評を試みなくなるが、それは他日に譲らう、兎も角も、政民君の新聞記者としての手腕は帳場にもなりて行數を算し、料理番ともなりて記事を鑑別精選してあきざること依りて、敏活なることが證せらる、主筆たり編輯長たりで、克く兩刀を使ひ分くる、圓明流の開祖宮本武藏も徒跣で

逃ぐるほどの達人と謂はねばならぬ。

### 記事の訂正を望む

金子正明

鐵山志兄、明鏡は形を映し、解剖は核心を穿つ、足下の人物評論は、快刀亂麻を斷つが如く、而も其切れ味の美事なるは、武道の達人が當るに任かせ、對手の首を薙ぎ立てるが如き概がある、特に引例の該博と、筆力の勁拔とは、實に異彩にして權威ある是れ貴下ならではの能くし得ざる、獨特の壇場たるを失はず、讀者の一人として満腔の敬意を表し、益々貴下の勇健を祝福す。

由來人物評の難きは、戰場に於ける斥候の難きに勝れり、觀る人、觀らるゝ人に依り多少は見解を異にするものあり、且つ最負目愛憎の念、若くは材料の種類、境遇立場の關係に依り、攻撃となり、お世辭となり、或は誇大となり、或は偏少となり、褒貶一様ならざるは、世上多く目撃する事實である、而して譬へ近所合壁に住み、朝夕顔

を合せ、親しく語り合ふ間柄にありても、其人の経歴理想實力等、判断の付かぬ場合もある、殊に既往幾年かの経歴や功罪を質し、断定的批判を試むるは素より容易のことにあらず、裁判官の宣告同様な、的確なる立證でもなければ、甚だ困難の注文である、況んや裁判官の審理判決でさへ、往々當てにならぬものあり、尤も久しく信ずべく傳へられた正史にさへ、間違つてることが近代往々發見された實例も澤山あるのである、然るに足下の所論は、觀察も公平で、批判も感情に馳せらず、頗肯緊に當たれるもの多きは、以て筆者の見識非凡なるを證するものである、然れども筆者も亦等しく人間たる以上は、考へ違ひも筆の誤りも、必無を期することを得ない、山口政民君の評論の中に生と關係ある記事は即ちそれである。

評論の大部分は筆者の見る所に誤りはないやうである、極めて穩健適正と見る、併し同君が小學校を出で漢英を學んだ、其師匠は生であつたやうだとの一節は相違である生が山口君と知つたのは、二十餘年前になるが、小學校を出た當時ではなく、記事にある松本君平の創立された、政治學校を卒業の後である、併し山口君とは多年の知己

であるから、同君の性格閱歴及手腕實力等に就ては、最も能く承知する一人であると共に、同君の大なる美德、眞實を世辭や虚偽の推獎ではない、珍らしい長所美德の所有者なるを認證するものである、今は同君の人物評を試むる場合でないから、唯誤りの點だけ訂正を望む。

## 金子君に復す

鐵山生

金子正明詞兄足下、昨者、余の人物評論について過賞を辱ふす、恐縮千万の至り、其の切れ味の美事なるは、武道の達人が當るに任かせて、對手の首を刎ぬるの概あり、筆力雄勁なりと謂ふに至つては、穴あらば潜りたき心地致す、當らざる遠し、持合はせの鈍刀をひねくるのみ、實は美人に腋の下をくすぐられるよりも、くすぐつたき思ひが致し候。

余が人物評論については、過日告白した通り、粗製濫造の作である、氣合の乗らざること夥しい作品である、是迄氣まぐれに書き捲くつた數は、積もつて四十を超して居

が其の二三を除く外は、當座しのぎの拙作なりと、吾れ自からが保證する所なり、兄より御叱かりを受けた、北海タイムス編輯長山口政民君の如き、實は都合に依り、くべからざるを書いたのである、一度は書く積りでは居たが、同じ書くにしても、少しは念を入れずばなるまいと思つて差控へた矢先き、何ふした拍子か、つい不意打ちに駒が飛出した次第で、事實相違の廉あるは、覺悟の前であつた、政民君が小學校を出て、英漢學を兄に教はつたらうと筆が走つたのは、僕も聊か疑問で、教はつたさうだと言つて置いたのである、兄が英漢學の手ほどきを爲されたのでないと、御親切の異議申立ては、茲に謹んで訂正の裏書を致す、併し山口君は誰れにか教はつたのであらうから、其のお師匠さまの名前が、權兵衛太郎左衛門と違がつたまでだ、元來善意も悪意もなき、五月の鯉の吹き流しに過ぎざることを、お序での砌り政民君に御取次が願はしゆう存ずる。

僕はお恥しながら山口政民君と半面の識なし、併しながら同君の名聲は雷の如く天下に轟くに於て、しわぶきの光榮に接せぬとしても、是れほどの名士を記憶の帳面に載せずには居られない、既に載せた以上は其の人と爲りを調査せずには居られない、故に僕は政民君が先づ北海旭新聞の主筆として、本道言論界を賑はした時から、彼の人物の研究を怠らなかつた、政民君は僕に取つては「要視察人」であつたのだ、兄は政民君の長所と美德とを知るや詳かなりと言はれるが、僕も同様に承知して居る、併せて短所も不美德の點も知悉して居る、政民君の人物の輪廓は、僕の友人松本君平から聽いて居る、先年君平が自己の主宰する青年團の用向で、渡道した時、旭川まで行を供にし、時の旭川區長市來君が某旗亭に歓迎の宴を張つた節にも、往時を追懐して何や彼やの笑話に一夜を飲み明かしたが、其の折り政民君の批評を篤と承はつてゐる、曾つて日本電報通信社長の光永星郎が、當市山形屋に陣取つて、何事かを目論んで居た時僕は郷友の故を以て駕を枉けたが、其の折り立派な人物が對談中であつた、其の紳士が歸つた跡で、光永へ彼は誰だいと聽いて、初めて其の人が山口政民君であつたことを知つた、政民君を拜見したのは、之が皮切りであつた、だが未だ曾つて一度も御目にかつて、新らしい思想の程度を測量するの機會を得ない。

金子君足下、斯やうな次第で、政民君が小學前後時代の事は、誤つても致方ない、君が英漢學を教へたでない事を確めたが、假りに政民君が君に教はつたとしても、少年時代の事だ、何も別に山口政民君の貫祿に關係しまいと思ふ。

金子正明足下、時代こそ違へ君も僕も同じく、曾て徳富蘇峰先生の幕下として、國民新聞に筆を執つたこともある、義は兄弟の如しだ、兄弟の誼で、政民君に關する事項の誤れる点を垂教されたるを感謝する。

## 札幌公友會の智囊 大瀧林之助

札幌市會は全道の模範市會と言ひたい、濟々たる多士の茶話會とは、おくびにも出したくない、人或は一山百文的、十把一束的人物の集團に過ぎないと罵るものが居る、併し、其れは酷評である、札幌市民を侮辱する、容赦の出來ない暴言である。

だが慾目を放れて、市會議員を一瞥した時、記者と雖も人物の不揃さに、思はずブツト噴き出したくなる、人物を發見するに難からず、好く雜魚の大魚交りと謂ふが、嚴格な尺度で議員資格調査を行つたら、凡てが一山百文……マア一山五百文位までにはセリ上げられぬでもないが……所謂大魚混りの雜魚共が、ウヨ／＼してるのは争へない、明白の事實で、唯此の點は如何に最負目でも見逃し得ぬことを悲む。

雞群の一鶴、市會に於て、林之助君の位地を例せば、雞群の一鶴なる言葉を當筈めたくなる、試に三十有餘名の市會議員を丸裸になして、裸踊りをやらして見給へ、無難に踊り抜き得るもの幾人かある、更に一步を進めて、頭蓋骨を割き、腦味噌の分量を秤量して見給へ、世間でチャホヤされる程の人物としては、腦味噌が甚だ不足なるに合點か行かう、世間で持囃される人物は、多く風袋的で、眞價を差引くと、或は風袋の方が重いかも知れない憂がある。

大瀧林之助は、風袋的人物中に特立して居る、恰も蝦夷富士が雲表に突出して、中空に雄姿を誇るが如し、彼尙未知數である、彼の眞價は容易に窺知を許さぬ、若し彼が

風雲に際會しなば、彼の眞價は遺憾なく發揮せられるだらう。

彼の學殖の淺深は記者知らず、其の早稻田大學に入りて、政治經濟學を専修し、卒業後尙智識を海の東西に探めて怠らない處から推すと、彼の學殖は相當なるを疑ふべからず、是に於て市會議員中學識の伍すべきもの、僅かに二三指を屈するに過ぎまい。

彼苟も語らず、苟も論せず、相成るべくは黙り虫たらんと欲するに似たり、故に往々不得要領居士と誤られる、是れ未だ彼の眞相を悉せざるためである、彼や不得要領を裝ふて、却々要領を得て居る、一見無策に似て、而も胸三寸の裡に測定し得ない機略を藏す、世の活眼にあらずんば、林之助の眞價を看破し能ふまい。

記者は未だ曾つて、林之助の眞面目なる、政治經濟財政上の高見を聽かず、故に彼が如何なる卓抜の見識を有するかを詳かにしない、勿論座談的の議論は、屢々之を耳にしたけれども、當今の時務に對する一家言に至つては、與かり聽くを得ない、是れ言はざるの罪か、聽かざるの罪か、二者孰れにかあるのであらう。

西瓜畑には茄子は生らない、此の理窟から推すと、現金掛値なしの政治意見が推測さ

れぬでもない、彼は前陳の通り、早稻田大學出である、由來早稻田は憲政派の政治家を製造することになつてゐる、其處で林之助の政治經濟上の意見は憲派の主張に近からうと推せらる、今日は籍を政本に置くが故に、憲派とは反對の立場にあるが、底意を洗つて見ると、即ち環境の事情に拘束されることなく、無遠慮に意見を吐露したならば、其の憲派と一致はすまいかと推測されるは、強ち人を誤る判定でないやうだ學問は物の道理を教ふるのである、其の習つた道理を現今の時務に適用し、活用する處に學問の味がある、之が爲めに政黨各々異なつた政策を樹て、所謂國利民福を計らうとする、更に其の政策を大別すると積極消極とに分れるが、今日の場合、孰れを採るが便利であるかは、各々見やうに依つて異なるので、恐らく政黨其れ自身ですらも、定見はない筈である、消極と言ひ、積極と言ふ、畢竟病氣に對する、當座の對症療法に過ぎない、勿論絶對的療法にあらざるは勿論である、記者は此點に就き、卓越の財政經濟意見を有する、林之助の對策を聽くを樂む。

讀者よ誤解する勿れ、學理の活用は自由である、其の憲政畑に修養したるが故に、憲

政臭を脱しられまいと言ふのでない、今は故人となつたが、曾つて政友會の總務を勤めた江藤哲藏……中西六三郎の恩人……は矢張り早稻田出の秀才であつた、政見の相違は致方ない、大隈の學校に育ち、大隈に薰陶され、寵愛されたが、政治家として、徹底徹尾大隈に弓を引いて死んだ、林之助も結局、江藤と同一の徑路を踏み、今後大に政界に活歩するは、記者の固より望む所である、願くは林之助日頃の沈黙を破ぶつて國家民人の爲め努力せよ、而して一切の情實を抛つて、來るべき普選に備へよ。彼の將來に就ては、吾も人も多大の期待を有した、然るに天何ぞ無情なる、忽焉として九天に拉し去つた、彼は不幸にして丹毒症に斃れたのである、天若し假すに今後三年の歲月を以てしたならば、札幌公友會の參謀總長として、政治的活躍の世を驚かすものあつたであらう、實際彼は鳴かず飛ばずに十年を費やした、今や將に雄飛活躍の天地を展開せんとするに及んで逝く、寔に痛惜に禁へない。

### 前北門銀行頭取 長友比佐吉

天下悲むべきもの多し、而して冤に死する位悲しいことはあるまい、今回無常の風が北門銀行を吹き捲つて、頭取長友比佐吉君を、八萬地獄に落し去つた、彼は温厚の長者であつた、敢て人に怨を構ふるほどの厄介な人ではなかつた、又其の年齢から推しても年を経て愈々圓熟の境地に入こそすれ、敢て老朽職に耐へぬほどでなかつた、天何ぞ無情なる、忽焉として死地に陥れた、是れ免かれ能はぬ天の配劑か、抑も亦人爲的小細工に因るか、孰れにしても命の窮する處に、一掬同情の涙なきを得なす。

彼は北門銀行の功勞者である、曾て甚だしく紊亂麻の纏れたる如く、破産に類したる北門銀行を整理し、改善し、銀行の面目を一新し、預金者たり、若くは預金者たらんと欲する人の、危惧の念を取り除け、今日の隆盛を極むるに至つたのは、彼一人の力なりとは斷じ得ざるまでも、少なくとも彼は其重なる功勞者の一人なりと推奨される權利があると思ふ、實に行務の刷新は、彼の誠實なる巨腕に頼りて斷行されたのである

史記を讀んで准陰侯傳に至り、彼韓信が攻城野戰に努め、強敵項羽を屠り、四圍の群雄を退治し、遂に漢の天下を定めし殊勳者にも拘はらず、晩年に至り、遂に刑死した當時彼は述懐すらく、狡兎死して走狗烹られ、高鳥盡きて良弓藏められ、敵國破れて謀臣亡ぶ、天下已に定まる、我回より當に煮らるべしと、韓信の述懐は、移して以て長友君に適用することを、彼は恐らく微笑むであらう。

長友君は賢明の人である、榮枯盛衰は、浮世の常道なるを知らざるにあらず、然り彼は賢明である、其の北海道拓殖銀行頭取の寵兒井上外幾雄が、常務取締の重を擔ふて北門銀行に嫁するの時、既に危険の一身に迫るを豫知した筈である、彼の位地は、此の時より風前の燈に似て居た、今日此際突然として危険の迫つた譯でない、而も職務に忠實なる彼は、一切を天に任せて顧みなかつた、或は彼が頭取の椅子に戀々として去る能はざる横議を聴かぬでもない、然れども是れ公明なる、彼の心事を曲解するものの妄議妄評に過ぎない、彼は天分に安じたのである。

人の口は自由開放である、決して戸は建てられぬものなり、井上常務が、頭取の株を横領しやうと云ふ、野心を抱きたりと云ふことも、是は勿論人の蔭口といふものである、只人の意外とする所は、事功を急ぐため、長友毒殺の手段を廻らしたと思はれたことだ、若し毒殺に成功して、首尾よく跡釜に座し得なかつたとしたならば、其毒殺は失敗に終はれりと言はなければなるまい、併しながら余は信ず、井上常務に限り、左様な不埒な非望を懐かぬと云ふことを、井上常務は、決して左様な小人でない、優等で大學を卒業し、恩賜の時計を拜受したる人である、何を苦んで反間苦肉の策を施す必要やある、世間に取沙汰する悪評は、詰る所は、口善悪ないもの、沙上の偶語に過ぎまい。

温厚なりと稱された長友頭取は、何故に阿呆拂ひを喰ふべく餘儀なくされたかと云ふことの、真相を研究するは、極めて必要である、井上常務のために、翠丸を握り潰ぶされたに依ると観るは皮相の見である、長友如何に弱勢なりと雖も、而して井上如何に奇策縦横なりと雖も、マダ／＼若輩の井上のために往生を遂ぐるやうな葉武者でない、勿論井上の毒殺手段は幾分の効果を奏したのであらうが、其は決して致命傷と觀

るべからず、然らば致命傷は何であらうか、他なし拓銀頭取加藤敬三郎氏の北門銀行をして本道金融界の覇權を握らしめん大計雄圖の決行についてである、加藤頭取の雄圖を窺ふ時、彼の腦裏に往來する野心慾望は、第百十三銀行、北海道銀行、北門銀行を合併して、一大銀行を設立するにあるを信すべき理由あり、從來或は此の秘策の實現にむかつて、手を染めたかも知れぬ、併し北海道銀行は特殊の銀行であり、普通銀行と多少趣を異にするを以つて、有利な條件が伴はなければ、此の議が纏まらぬのは初めより判かり切つて居る、加藤頭取の威力は、親銀行の立場にある、北門銀行には及び得やうが、移して以て北海道銀行を征服し能はぬ。

銀行併合の議行はれず、此と同時に加藤頭取の抱ける雄圖も、亦消滅したるにあらず彼は大計の現實に向かつて熱度を加へたに相違なし、一朝の蹉跌に雄心を抛つほどの怯者でない、左ればだ、彼は彼の勢力範圍に於て、事を爲すべく決心したのであらう言ふまでもなく、彼の勢力範圍の銀行は、北門銀行である、實際今は北門銀行を擴大する外はない、是れならば手製の甘酒だ、味く出来ない事はあるまい、如何にして擴

大するかは問ふまでもなく、彼の胸中に書かれたる秘策は、北門銀行の資本を五百万圓に増加するにあり、今日五十万圓の資本金を、一躍十倍に上げせやうとする、此の如き大道具大仕掛の藝當は、尋常一様のシミツ垂れ等が、思ひも及ばぬ所で、霸氣満々たる吾が加藤敬三郎君にあらざれば出来ない藝當である、余は加藤君の大度胸大計畫に敬意を表する、常に資本の不足をかこつ本道に、大なる資本を呼び入れることは願ふてもなき幸福である。

五百万圓に増資の計畫が、今日の如く財界不況の時に於て、果して首尾よく遂行するや否やは、少なからぬ掛念を有する所、加藤頭取とも有らう手腕家が、正さか向ふ見ずの大計畫を樹てたりとは思はぬ、のみならず此の大計畫の遂行は、記者の承知する限りに於て可能性を見る、此の計畫の裏面には若槻總理大臣あり、濱口大藏大臣あり其他大資本家の諒解を得居ると言ふのだ、して見れば此の計畫が畫餅に歸しやうとは万々信ぜられない、果して此計畫が實現するの曉には、其の最も苦痛を感じるは、米屋銀行と北海道銀行であらう、兩行の負ふべき痛手は、存外に深大なりと想像される



鶏を割くに牛刀を用ふるは愚である、如何に大は小を兼ねるとは言へ、物には程合ひがある、其の程合を誤らざることが肝要だ、北門銀行頭取の交迭を餘儀なくされた動機が、五十万圓の小資本を五百万圓の大資本に増資する前提として、敢行された云ふことは争ふべからざる事のやうだ、借家住居の貧乏者でも、時を得て金満家となり大家高屋の主人公となり得ない理窟がないとしたならば、五十万圓の身代には、不足ない人物だが、十倍の大身代になつては、器量が足りない云ふ理由も立つまい、故に長友君は小店の主人公には適材であるが、大店の主人公としては手腕が足らず、貫祿が足りないとせば、長友君は痛く侮辱された譯だ、銀行家としての長友君を見縊るのは早計ではあるまいか。

何と言つても長友君は薄運の人である、彼は正しく狡兎盡きて良狗煮られたと同じ運命に陥つた、彼の心事は知る人ぞ知る、別に煩悶する必要もあるまい、進んで新生面を打開すれば宜からう。

大正十五年八月七日印刷  
大正十五年八月十一日發行

定價金貳圓

著者 蓑田政徳

札幌市南七條西三丁目一番地

發行者 泉山貞四郎

札幌市南九條西七丁目一〇三八番地

印刷者 中野正

札幌市南三條西八丁目七番地

印刷所 光榮舎印刷所

札幌市南三條西八丁目七番地

發行所 北日本刊行協會

札幌市南七條西三丁目一番地



556  
79

終

